

特205-651



1200600280186

424

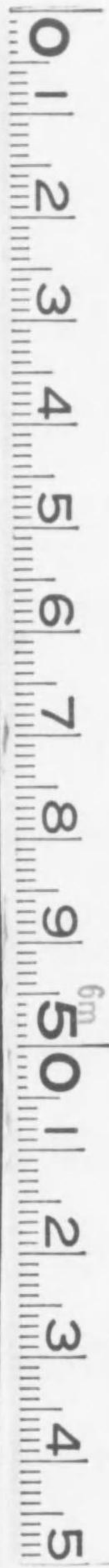
特205

56

651

士 佐藤定吉著

皇國信仰の根本原理



始



特205
651



工學博士 佐藤定吉著

皇國信仰の根本原理



新世紀への祈禱

ついに、待望の皇紀二千六百年は到来した。

今から百年前、二千五百年の日本は、徳川時代の幕末、勤王の士が茨の道を踏んでゐる新日本胎動の時代であつた。百年後の今日、現代の文化を目撃したならば、うたゝ感慨に堪へないものがあるに違ひない。

然り、而して今より百年後、更に皇紀二千七百年を迎へる時、その時の日本は如何になつてゐるであらうか。また如何にあらねばならないか。われは祈る。新しく迎ふる二千六百年が一區劃期となり、祭政一致、神慮奉行の神國日本は完成し、上御一人は萬國萬民の前に神皇として君臨ましまし、下皇民は、陛下の股肱として、ただ聖慮具現に生き、誰一人自己の爲めに生きるものなく、みな悉く全人類を指導して神の經綸具現の爲めに日常生活を勵むものとならん事を。

なほ第二に祈る。全世界の國々は、百年以前徳川時代の一藩よりも小さく、英米佛獨悉くが何某村と呼ばれ、神の稜威の前に信従する世界國家が出現し、萬國民は一大家庭となり、神皇は神の權威の座に就き給ひ、神への服従、そこに人間への眞の自由境が與へられるに至らん事を。

なほ第三に祈る。これまで死の彼方に秘められた神靈界が、これより後如實に手に取るやうに目視する新時代が與へられ、誰一人死を怖るゝ者なく、永遠不死の生命の歡喜に生くるに至らん事を。ただ畏るゝものは「神」で在し、ただ恥づべきものは罪であり、ただ知るべき最高の智慧は神の恩寵によつて人類に許されたる永遠の救である事を。

皇紀二千六百年を迎ふる今後の新日本の存在が、少なくとも以上の三つを遂行してなほ餘りあるものに祝福されるに至らん事を、謹みて父なる神の聖前に祈り奉る。

序

皇紀二千六百年を迎へて、日本はいよいよ新世紀に入った。さらば、我等はいま何をなすべき乎。

新世紀に入った今の日本は、非常時中の非常時である。開闢以來、皇國歴史未曾有の多難多事の歳こそ今年であらう。過去に於いても大難襲來、國危しと見える時、常に天佑神助の降臨せし國こそ神國日本であつた。國民の心に大和魂の熱火さへ燃えておれば、如何なる國難も、必ずや神の榮光に一轉するは既定の事實である。

而して、現にいま我等はその天佑の巨大な聖手を鮮かに眼前に拜する。その天佑神助とは何か。此れ皇紀二千六百年の新世紀を全國民がこの非常時に迎へて未曾有の緊張裡に心を新に奮起しつゝある一事である。この新世紀を期して、全國民の靈魂の中に胎動しつゝあるものは、「國を擧げて神武天皇の創業に還れ！」との一事實である。

神武創業の骨子は、御詔勅に明かなる如く、第一に天徳ゆたかなる神國としての完成であり、第二に、君民一體、神の正義を踏む大道の完成にある。先づ、國內に神の生命が旺盛しないで

どうして天涯萬里の東亞の天地に神の新秩序建設が完成するであらうか。

内外偕に國難の山積する此の非常時に、先づ第一に整備すべきものは、滅死奉公、神慮奉行を斷行すべき國民内部の靈的結盟である。この一事なしに、如何なる國策も、巨億の財も強力なる武力も針路を失つた巨船に等しい。

外部の重壓がいよ／＼強くなればなるだけ、國家の危機が迫れば迫るだけ、皇國の内部には一死盡忠の赤誠は火焰となつて高く天に冲すべき一事を期待し且つ之を信する。國難は名刀日本を鍛ゆる熱火であり、ハンマーであり、冷水とならう。

されども、私は切に憂へる。今の國民中堅層の精神内容と思想は、國家の大任の前には餘りにも貧弱すぎる。歐米の個人主義と利功主義の病弊は餘りにも深く國民靈魂の中に虫ばみすぎてゐる。願くば、耐ふるに難き試煉の來らざらん事を。更に祈る。一日も早く熱火に燃ゆる皇國信仰が確立され、而してその信仰の基礎たる皇國神學の原理が整備され、更にその信仰が實生活の中に鍛ひ上げられて、如何なる苦難をも克服するに至らん事を。而してその苦難が神の榮光を發現する好機に化せられるまでに皇民信仰が純化、鍛錬されん事を私は祈るのである。

實に、皇國をして萬代に神の榮光を顯はさしむるものは、是れ實に皇國信仰の徹底とその鍛

鍊より以外にないと信する。

皇國日本にとつては、最早や、何宗何派の信仰的對立時期は既に過ぎ去つたものと私は見て

ゐる。特に外國傳來そのまゝの思想は既に皇國生命の中に消化しつくす時が到來してゐる。我らの切なる待望は皇國一億の民が一人の洩れなく、皇國に降臨せる神命を具現するに足る世界的皇國信仰の信奉者とならん事である。而して今年の皇紀二千六百年がその一大回轉機ならん事である。今は、實に、皇國內に於ける總ての既成宗教は、佛教と云はず、基督教と云はず、儒教と云はず、又皇國の傳統を繼ぐと稱する宗派神道と云へども、それらの悉くが、各自の信仰内容について純正なる皇國心を規準として今一度猛省再検討をなし、皇民一齊が正しき皇國信仰に先づ徹し切り、然る後各自の分野に歸るべき秋であると確信する。

由來、日本國民は言あげせずして、皇國に一貫する生命の大道を握り、何の躊躇なくその道に身命を托した民であつた。けれども今日の如く理性を至上位におき、萬事を理論的に考察せずんばおかの習性に教育された現代の中堅層の皇民に對しては、矢張り、嚴正なる理性の下に

理論的に皇國信仰の内容を基礎づける必要がある。かゝる理論體系を具有する皇國信仰の出現こそ刻下の急務であると私は信ずる。

著者が科學を取扱ふ心的態度とその方針のもとに皇國信仰の本質を検討し、且つ多年體驗し來つた信仰内容を、理論的に綜合して、皇國信仰の基礎原理の體系を整へたものが、この小著である。素より僅かにその梗概を示すにすぎないものであるから、こゝにその意を盡し得てゐない事は言ふまでもない。

皇紀二千六百年を迎へ、如何にかして皇恩に報い奉る微衷をさゝげたく、新年匆々、繁忙の中に寸暇を見てペンを走らせた一篇が即ち本小著である。かゝる小さなものであつても、せめては、正しい皇民信仰の本質に對して認識を深めてくれる友が一人でも國內に増し加へられるならば、著者の喜びはこれにすぐるものはない。

神よ、願くば一億の同胞が一人の洩れなく眞の皇國信仰に確立し、その大盤石の上に彼等の全生命を托するものとなさせ給へ。

皇紀二千六百年正月七日

淺間山麓 靈響山道場にて

佐藤定吉

(4)

増補重版の序

皇紀二千六百年記念として同年初頭に「皇國神學の基礎原理」と題して、今後に於ける皇國民の堅立すべき皇國信仰の學理の基礎となるべきものを小冊誌に纏めて江湖に送り出した。そして再版を重ねること二回に及んだが、時代は、急轉直下、皇紀二千六百年を以て遂に日米英宣戰の布告となり、大東亞戰爭の火蓋の幕は切つて落とされるに至つた。

皇道の世界宣布は原理の時代を越へて實踐の域に突入したので、本書にも大増補を行ひ、皇國信仰の具体的内容をも概説する事に致し、「皇國信仰概説」と、「日本神觀への確信」と、「皇國信仰四大要素」と、「國體の本義と皇國信仰」の四編を加へる事にした。

本書が聊かにても、皇國に於ける信仰界に何物かを奉仕する處あらば、幸甚之に過ぐるものはない。

皇紀二千六百年十二月廿五日

淺間山麓にて 佐藤定吉

(5)

目次

一、神の經綸

- (一) 神
- (二) 神の顯現界
- (三) 神の筋書
- (四) 天業二則
- (五) 一粒萬倍の筆法

二、神國日本

- (一) 天の役割
- (二) 獨斷の輕舉に陥る勿れ
- (三) 神國の證明
- (四) 神國の科學的立證
- (五) 歴史哲學よりの證明

三、皇國に命せられし世界的特殊使命

- (一) 神政王國の完成
- (二) 皇國使命の重大性
- (三) 天の保證
- (四) 物心一如の思想
- (五) 時は來れり

四、救

- (一) 民の聖化
- (二) 救とは何か
- (三) 罪と死
- (四) 信仰道
- (五) 禊祓
- (六) 罪の解除四則
- (七) 大悟徹底道
- (八) 福音信仰道
- (九) 結語

五、天業翼賛

- (一) 神國の内容整備
- (二) 誠と愛
- (三) 誠と悔改
- (四) 誠と祈禱
- (五) 罪の救と信仰
- (六) 信仰結盟

六、皇國信仰概説

- (一) 皇國信仰とは何か
- (二) 信念より信仰へ

七、日本神觀への確信

- (一) 天つ神信仰

八、皇國信仰四大要素

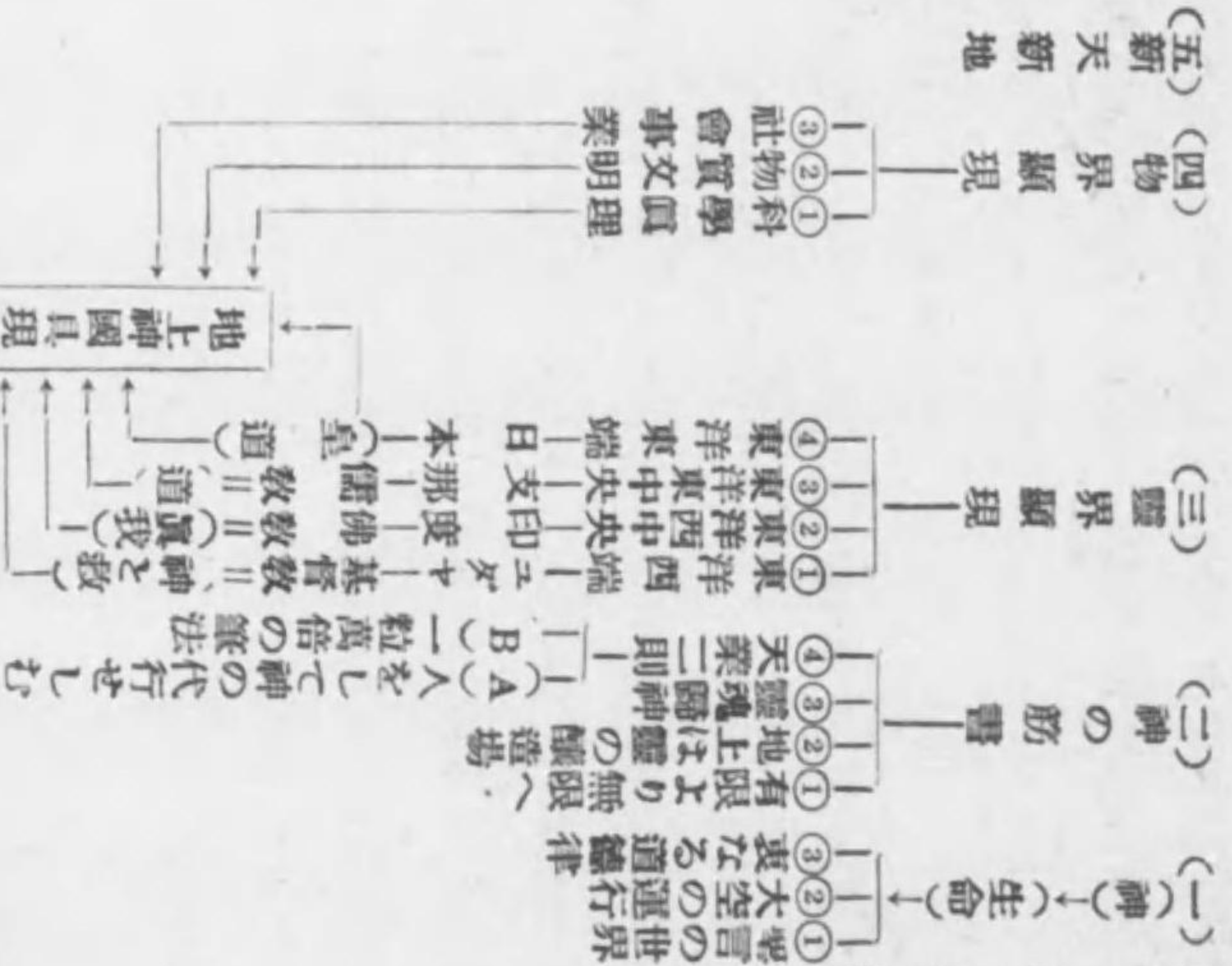
- (一) 神救信仰
- (二) 信仰の根據
- (三) 神の權威發現
- (四) 國体の礎石
- (五) 天皇信仰
- (六) 六合開都信仰
- (七) 天佑信仰

九、國体の本義と皇國信仰

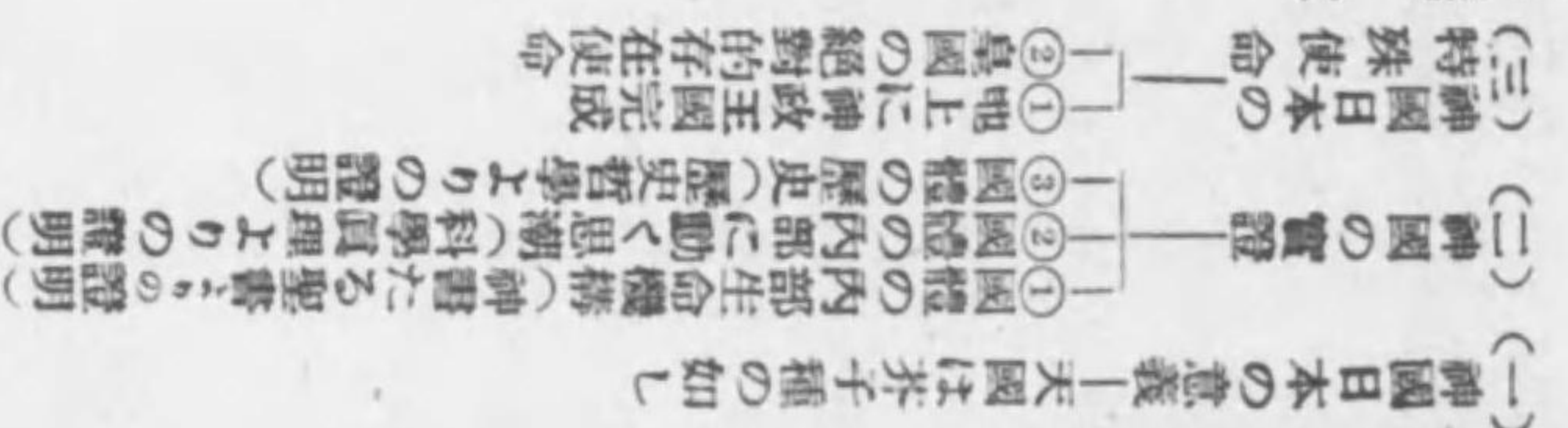
- (一) 國体の三要素
- (二) 國体の三精華
- (三) 神意の發動
- (四) 重大なる分岐點
- (五) 眞理は何れか
- (六) 信念の立場を取りし理由
- (七) 科學する心
- (八) 國体に對する新しき見方
- (九) 國体の本質
- (十) 神格國家

皇國信仰の根本原理

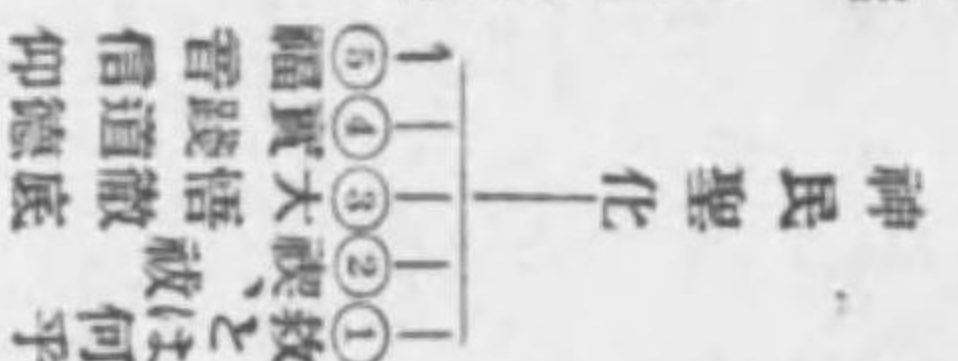
第一講 神の經綸



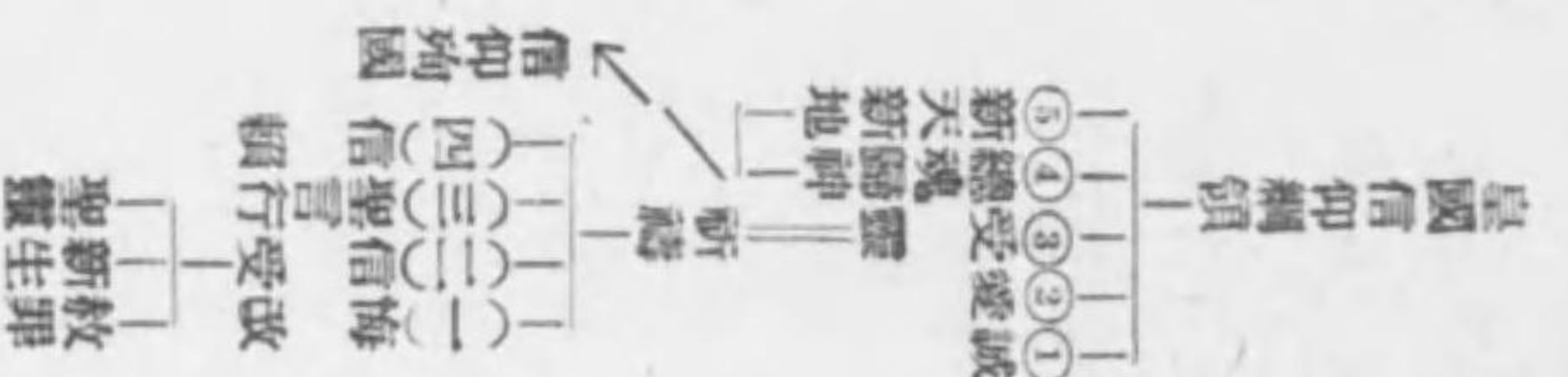
第二講 神國日本



第三講 救



第四講 皇國信仰



神の經綸

(一) 神

未だ天地^{かみつち}あらず、未だ光あざりし先から、宇宙には「靈」が在した。之を「神」と呼ぶ。萬物は、神の自己顯現として成つた。宇宙靈が自己の意志表現として先づ第一に現象界にあらはれそめたものが、最近の電子學で云ふ「負性動的エネルギー」である。それが更に有形の姿になつたものが電子である。電子が相寄り、相結んだものが、この日月星辰、山川草木の可見世界である。

(1)

即ち知る。宇宙靈なる隱身^{こもりみ}の神が、その心を宇宙と云ふ一つの空間に書きしるした神の言が、我らが目のあたりに見てゐるこの日月星辰の有形の天地である。

げに、萬物は神の言であつたのだ。

天地萬有の奥に、神の言の聖なる世界がある。見えないけれども、神の生命は、萬物の奥に漲り充ちてゐる。聞えないけれども、神の言は天の涯より涯に、地の果てより果てに滿ち溢れ

てゐる。

私たちは、見えるものだけを見てはならぬ。萬物を通じてその奥に充ちてゐる神の言を聞き、見える日月星辰の背後に充ち溢れる神の靈の世界を、ちつと心で見つめるべきである。

x

x

x

深く心すべきは、「物質があつて生命が生じたのでない。先づ生命があつた。そしてその生命の表現として、物質が創造されて來たのだ」との事である。

近代四百年の人類生活に一つの根本的な大錯誤があつた。夫れは「物のある處に生命が生れる」と間違つて教へ込まれた思想である。それで肉體が焼かれて亡くなれば、生命も亡くなつたのだと間違へて考へるやうになり、その果ては死を無暗矢鱈^{むくらたが}に怖いものに爲て了つた。

そうでない。生命の有る處に物質が創造されるのだ。生命は物の變化によつて亡くなるものでない。一つの形が亡くなつても、生命は新しい形に復活進展して行くものなのだ。これが宇宙生命の鐵則であり、原理であり、事實である。進歩した近代科學は、この事實が眞理であると私たちに高らかに叫ぶ。

近代科學最大の貢獻は、人類恐怖の的であつた「死」の暗黒を、美事に打ち破る光を提供す

(2)

るに至つた一事である、と言つても過言ではない。「靈」と「物」との関係が會ての日に天動説が地動説に變つたやうに百八十度の轉向を來したのである。

大切だから、くり返して言ふ。

「物」だけを見てはいかぬ。その奥に躍如として波打つ「神の言の世界」がある。この世界に私たちは安住しなければならぬ。

所詮、「物質」は神意具現の一道具としておかれてゐるのであつた。故に、この目的の爲にのみ物質を自由に使ひこなすべきである。決して自分の低い慾を充す爲めに肉体や物質を用ふべきでない。それは神への冒瀆である。

今の世にかく迄はびこる罪惡の一切は、この大切な急所を外して物質を亂用するから起る。

こゝに病根がある。この一事さへ正しい関係に取り戻せば、肉體や物質は拜みたくなるほど尊い神の姿を地に映す存在物となるのだ。

皇國の民は、先づ此の最大義について、何れの世界萬民にも先んじて、「物」の扱ひ方を神の眞理に立つて活用の模範的雛形を提示する役割に歸るべきである。

地上生活を憂苦だ、娑婆だなどと悲觀してはいかぬ。人生こそは無形の天國を有形に現はす

尊い創作の仕事場なのだ。最後の「死」までも、その爲めの天與の一大機會として聖用する處に私たちが地上へ遣はされてゐる所以がある。かゝる民が皇國の臣民なのだ。

(二) 神の顯現界

物質の皮相界を見て惑はされてはならぬ。常に仰いで忘るなかれ。「物」の奥に漲り充ちる神靈の世界があることを。

日月星辰がただ無意識に機械的にぐる／＼と廻つてゐると淺幕に考へてはならぬ。

見よ。大空に懸る日月の動きを。是れこそ神の言である。こゝに神が語つてゐるではないか。迷ふな。人の心の衷を貫く道義の一念は、大空の星々と同様に、地上の人々の中に神が植ゑつけた「道」であつたのだ。道徳性は人が自分で考へ出したり、人爲的に習性として成つたものではない。

神の心は天地の公道となつて顯はれてゐる。天地の公道は、大空にあつては、日月星辰の動きとなつて顯はれ、人の心の中にあつては、道徳律となつて顯はれてゐる。

深く思へ。

神を信ずる信仰心と、大空の動きと、人心の奥を貫く道德律とは、もとく三位一體のものであつたのだ。三つが一つになりきる處に、神の聲は人の心に鳴り響いてくるであらう。

視よ、神の聖言の世界！

仰げ、大空の運行！

思へ、衷なる道德律！

此の三つを一つに堅く握り締め、有限の地上生活に神の永遠生命を具現するのが、神國日本の存在使命であつたと私は視る。

(三) 神の筋書

神の宇宙經綸の筋書は極めて明白であると私は思ふ。一言にてつきる。

「有限を通じて永遠生命へ！」朽ち果つる有限の中に無限が盛られ、有形の「物」を一つの醸造場として、神は神の靈を生々化育せしめておられる。而して地上に化育せられた神の子の靈

を宇宙に移し、天壤と共に無窮なる神の新天地を創造せんとする處に最奥の神の經綸がある。

夫れ、見ゆるものは暫くにして、見えぬものに永遠に至る。地球はその小さな靈の温床にすぎなう。

人類歴史の趣く處は、地上の事象を通じて人に神の聖意を學ばせ、遂に人をして神を發見せしめて神の大御心に歸入せしめる。歸入した後には天に聖意の成る如く、地に神意を具現せしめる一事の中に、人類窮極の歸趨がある。

世の如何なる變轉の奥にも、人類の靈魂をして神に歸らしめ、現幽一如、物心一體の神の世

實に人類歴史は一定の方向に動きつゝある。

一、有限より無限へ。

一、人より神へ。

此處に天業の天業たる所以の確然たる把握がある。

(四) 天業二則

天の聖意が地に成る時、いつでもそこに二つの通則があるのを見出す。

第一、神は先づ或る一つの特定の器うつはを選び、その一つの器が熟成するのを待ち、それを種子として全般に神意を普及せしめる。

第二、神は神自らが着手なさる代りに、いつでも人をして神の業を代行せしめるのが常である。「天に口なし人をして語らしめる」とあるのは此の事だ。

この二つが地に於ける天業の筋書のうち、最も注意すべき點である。

即ち、過去數千年に亘る歴史の進展は、悉くこの筋書の筆法にて人類歴史が神の經綸の中に運ばれてゐるかに見える。

而も選ばれる器には、夫々異なる天的役割が附屬してゐる。神の目的は一つである。森羅萬象の存在は、同じく宇宙靈の自己顯現に存するが、その發揮する機能と内容は、夫々その趣を異にしてゐる。是れ、天地の事象の中に一つの微妙な調和が保たれながら、同時に、個々の中に差別相のあらはれる所以である。

神の筋書のうち、靈界の眞理を示す最大の役割を持つのが、即ち「宗教」である。哲學や科學や藝術は、この靈界の眞理たる宗教を根源として、そこから顯はれてくる第二、第三義に屬する神の筋書の内容である。

宗教のうちでも、夫々、神の選びに従つて、その内容の特質が違つてゐる。

過去數千年の人類歴史を顧みると、地上には四ヶ處に天の選びの巨手が伸べられてゐる。

第一は、東洋の西端、ユダヤの地。

第二は、東洋の西中央、印度の地。

第三は、東洋の東中央、支那の地。

第四は、東洋の東端、日本の地。

神は何を是らの四ヶ處に期待し、夫々に如何なる役割を附與してゐられるであらうか。

第一、ユダヤの地への賜物は、全人類の「罪の潔め」である。第二、印度に授け給ふたものは「眞我」を見る光であり、第三の支那への賜物は「道」の光であり、第四の日本への賜物は

「國」の光であつた。西端ユダヤの地では、イスラエルの民族を神は一本の試験管として選ばれた。試験管は惜しくも破れた。けれども、夫れによつて人類に對する神の御要求が何であるかは明示され、また如何なる人物が神の救ひにあづかり得るかを明かに教へ給ふた。是によつて、どんな心の盲者、どんな心の聾者でも、明白に(一)「神」と、(二)「神の國」と、(三)「神の經綸」とを掌を指すやうに明白に知る道が開けて來たのである。

イスラエルに於ては、民族が選ばれたのであつて、「國」は神の選びにあづからなかつた。故に彼の國家は滅亡した。然し、ユダヤ民族は今になほ神の役割の爲めに残されてゐる。

一言につくせば、神はイスラエルの民を一つの試験臺として、次の三つを開示し給ふた。

(一) 神の義と神の愛が何であるか。

(二) 「神の國」とは如何なるものであり、如何にして來るか。

(三) 神の國を繼ぐべき有資格者は如何なる心懸けの人であるか。

神の國に嘉納せられる人々は、どんな心懸けの者なるかを明白に神はユダヤの地に示し給ふたが、然し、その神國を地上の「何處」から發足せしめ、「誰人」に神國具現の大任が委任されてゐるかに就いてはユダヤ民族には告げ給はなかつたのである。故に、この一事は聖書の何

處を探してもわからない。聖書を読んで識り得る事は上記の(一)、(二)、(三)の三事項が中心である。

第二、次に印度の地、ヒマラヤ山下を神は選んで、神に似せて作られた「人」の本性をつぶさに見つめる道を拓き、「眞我とは何ぞ」との人間自己に係る光を彼地に示し給ふた。これが即ち佛教の本領である。

故に、印度には、ユダヤの地の如く神と神の國を明示する光が臨んでゐない。この地に臨んだ特別の光は人間本來の面目に就いてである。これは他の何れの地の夫れよりも深甚なる巨光であつた。

第三、支那にあつては、神と人との關係にもあらず、また人間自己本來の眞我の光にも非ず、此處では人と人との相互間に於ける「道」についての巨光が照り輝いた。

第四、最後に、東洋の東端、日出づる國に臨んだ巨光は、神自らが自己を顯現したる國であつた。天上の「神の國」の實體が此の地に於て有形の姿に具象し來つた。此處に我が國體の獨一無二の特別使命がある。

此處に始めて具體的に、地上に神の國が大地に芽ぐんで來た。他の地にあつては、誰人が地上に神の統治の大權に選ばれてゐるかは全く封ぜられたまゝ未知の事柄であつた。然し、この

封印は、日本の地に於て始めて封が切られ、明かに開示さるゝに至つたのである。

而して、この「神の國」に芽ぐむ神の生命は、他から肥料と水とを要した。三千年の歴史の示す處は、第一、第二、第三の神の準備はみな第四の神國に集合して、肥料となり、水となつた。

今や、この日出の國より天業は發足せんとし、天の巨手は頻りに動いてゐるのである。

(五) 一粒萬倍の筆法

神が地上に天業を創造する時に、二大通則のある事は既に上述した。即ち、先づ第一に、特定の器を選び、之を天佑神助を以て化育し、訓練する。その神器が完成するに及んで、一粒萬倍の筆法にてその生命を地の全面に普及せしめる事である。

イスラエル民族の中に示さるゝ神の經綸に見ても、一々その然るを見る。例へば神は全人類救済の大業を、同時平等には示されず、先づ一人の信仰の父アブラハムを選び、彼に天の神約を示した。

素より、神の愛は平等である。が、その實行方法については、先づ一つの特定の神器を選び、

之を聖化し、之を通じて天業を進展せしめるのが、神の筋書の定石である。

アブラハムに繼いで、多くの兄弟たちの中より一人のヨセフが選ばれた。ついで、また數十萬の在エジプトのイスラエル民族の中から一人のモーゼが選ばれ、ついで、また代々の預言者が夫々の時代選ばれ、遂に神の天機は熟して、一人の神人イエスがキリストとして選ばれるに至つた。そして全人類救済の天業は個人個人の救の立場に於いて萬國萬民に普及するに至つたのである。

印度に於いても一人の人、釋迦が選ばれた。支那にあつては孔子が選ばれた。かかる個人個人の中に神の大生命が成熟するに至つて、たんぼぼの實が地の全面に飛び散り、各地に伸びるが如くに、神の生命は全地へと進展の道をとつた。

×

×

×

個人救済の後に來るべきものは、「國」と「國」とが、個人に於ける如く、神意具現の器として完成さるゝ時代の到來である。此の國と國との關係が神に歸入して始めて神の平和は地上に實現さるゝに至るであらう。

アブラハム、モーゼなどが或る一つの神の目的の爲めに神器として選ばれた如く、「國」を

一人格として、全世界に神意具現の目的達成の爲めに神靈が地上に具象した國が一つある。この神靈具象の國こそ我らが幾千代かけて、神國日本として仰いで來た大和の國、皇國日本ではないか。

一個の人物が神の器として聖用さるゝ迄にも長い歲月の訓陶を要した。況んや、更に重大なる天の使命を果すべき一人格たる神國が、二千年乃至三千年の齡を天佑のもとに訓陶を蒙る事の必要なるは見易い道理である。

皇紀二千六百年!! 神の大使命の前に、この年月は決して長しとはしない。今や、時機は漸く熟し始めて第二の天の岩戸は開けつゝあるかに見える。久しく冬眠に陥りし神國日本を起たしめて、神意具現の實を全世界に布かしめんとする天の巨手は、今我らの眼前に動きつゝある。仰ぎ願くば、この二千六百年の皇紀が、人類歴史を二分して、これより新しき神の秩序が全地に成らん事を衷心より祈る。而してこの重大なる神の經綸が人の罪ゆゑに狂ふ事なきを眞心より祈願せずにはおられない。

神國日本

(一) 天の役割

何を以てか、日本が神國として具象しておると云ふのか、如何にして是を證明し得るのであらうか。

天地萬有が神靈の表現であり、萬物が神の大生命の一細胞であるとするならば、一切の事物を通じて神を識り得るわけである。けれども、小さな地上の一存在を以て無限の神の全部を表現する事は不可能である。故に、地上の存在物は各自に分擔があるのは云ふまでもない事である。四大宗教に就いて見ても、各々に顯はれたものが、神の絶対の顯現であるとは云へ、それが神の眞理の全部でない、その一部である事は首肯するに難くはあるまい。聖書には、神の義と神の愛を啓示するけれども、神の國に就てはその全部を具現するに至つてゐない。また物質の本質に於ても深く示す處がない。

また佛典は、人間本来の面目を明示し、眞我が何であるかを的確に教へるけれども、それは人間の側からの見方であつて、神の側からの見方は示されてゐない。

更に、孔子の經典は「道」について深甚なる教訓を垂れてゐるけれども、靈界については觸るゝ處が少ない。

また日本神典にありては、國家を一生命體として祭政一致、物心一如の立場に於いて神意奉
行の使命が明示され、且つ天地修理固成の委任者が誰人であるかは之を明示するが、「神」と
「人」と「道」の内容に就いては、日本神典には之を審らかに爲てゐない。

夫々、神の顯現に各々異なる使命がある事を知る。天の光を仰ぐ望遠鏡が「聖書」であり、
人の本性を深く探る顯微鏡が佛典であり、地上の人間相互の「道」を知る双眼鏡が孔子の道で
あり、また凡百の機械器具を塔載し、荒波蹴立て、不惜身命、一路地上に於ける神國具現の
遂行に邁進する軍艦が、神國日本の惟神道であるとも云へるであらう。

故に、「神」について識りたい時は聖書を開くべく、眞の我を識りたければ佛典に學ぶべく、
道について知らんと欲せば孔子の經典に來るべく、また神意を不言實行したければ、日本魂の

洗禮を受ければよい。更に、また物質の本體に就て學ばんとすれば科學に就て修めればよい。

是れ迄は夫々の先入觀に囚へられ、夫々の聖典に顯はれた神の啓示が唯一絶對のものであり、
他は異端であるかの如くに考へたが、それは矢張り人間の小さな量見からの一管見にすぎなか
つた事を反省すべきだ。

神の啓示が夫々絶對ではある事に狂ひはない。ただそれが全部であるかに過信して、他を排
撃する處に偏見があつたのである。

夫々啓示の特質を統一總合して、自在に活用する處に、天業恢弘の實が具現してくると思ふ。
此處に、眞實の神慮があるのではあるまいか。

(二) 獨斷の輕舉に陥る勿れ

日本には、祖先靈を神として崇める光はあつても、未だ天地創造の神の御本質について聖書
が審かに示す如き巨大な光を仰いでゐなかつた。また人間の本性や道徳性に就ても佛典や經書
に遠く及ばない。それにも拘らず、何を以て日本を神國として選び、何故に他の諸國の遠く及

ばざる特異なる神命が此の國にかけられてゐると言ふのであらうか。

獨斷の罪に陥つてはならぬ。また客觀的保證を欠いだ不健全な信仰による輕信に墮してはならぬ。

安からざるに康し康しといふほどの不信仰は世になく、神國に非ざるに、神國呼ばりをするほどの冒瀆はない。

地上の事物が眞に天の眞理を如實に具現してゐるものならば、必ずそこにその眞理を證明すべき道が歴然と備へられてゐる筈である。けれども、眞理ならざるものを眞理なるかの如くに偽裝するならば、必ずや忽ちその虚偽の觀破されるは歴史に照して明白である。

X

X

X

日本が神國であると云ふ意味は、現在の日本が神の如くに完全無欠の道徳國であるとか、國民の個々が神の子として完成してゐるとか、そんな大それた事を云ふのではない。また未來に神國として完成される筈だとの遠い理想を夢みる事でもない。實に我等は一個の林檎の中にも宇宙の理法を見るべく、一滴の水にも天地の法則を仰ぐ如く、現實の日本の中に如實に神性を或る角度から見るのである。「それ天國は芥子種子の如し」と聖書は教へる。種子を構成する

穀や蛋白や澱粉は腐敗し易い。それらは天高く伸び行く芥子種の生命とは遙かに遠い別個のものである。それと同様に、假りに日本の政事や經濟や産業が如何なる現象を呈する事があつても、神國の神國たる所以は、それら以外に超然と高く聳えてゐるのである。現實日本の醜體を見て、神國日本の本質を見逃すやうな短見の國民が一人もゐないやうにと、私は切に望むのである。

(三) 神國の證明

大凡、眞理性を證明するのに、科學的研究ほど適切明確なものはないと私は信じてゐる。

眞實でないものを無理に眞理である如く假想し、それをどんなに辯護しても、人より出づる眞ならざるものは必ず自ら壞れて了ふ。然し、若し、それが神の絶對が地上に顯現したものであるならば、それが一時的に、よしどんなに暗雲に蔽はれる事があつても、必ずやその眞理性は證明される時期がある。人の企畫はみな壞れて了ふにきまつてゐる。が、然し、神の眞理は永遠に不易である。また、その眞理が餘りに偉大であり、その時代の智識が是を明確に立證し得ないことがあつたとしても、人の智慧の進歩と共にいよいよその眞理の光は高く照り輝いて

くる。

神の絶對が地に顯現したものは、あらゆる角度から考察して、一つの矛盾もなく、神より出でし甲と乙とを比較總合して見ると、兩者は符を合はすやうに一致し、甲は乙の神より出でしを證明し、乙はまた甲の神ながらのものである事を立證するものである。

古來六千年の人類歴史に於いて、既に文明人が偕にそは人の思想にあらず、天より出でたる普遍的眞理だと承認してゐるものが、少なくとも二つあると言つてよい。

第一、科學的眞理。

第二、聖書の眞理。

前者は物質界の眞理性を是非する物指であり、後者は靈界の眞理を明示する檢討濟みの尺度である。

日本國家の成因が、若し神より出でし事に間違がないならば、少なくとも以上二つの巨光に照し見て、符を合はすやうに楔合すべき筈のものである。若し、そこに根本的な喰ひ違ひがあるとすれば、我らは更に深く／＼自省を要すると思ふ。

日本國體が天さながらの神國であるとの事實に就いての證明は、幾多の道に於いて私は論證しうらと思ふが、さしあたり、ともすれば懷疑に陥り易い歐米的な實證主義論者に對して、次の三點を挙げさへすれば、その眞理性を證明するに充分にしてなほ餘りあると思ふ。

一、國體の内部生命の機構。

二、國體の内部に動く思想の本流。

三、國體の歴史性。

以上、三項を仔細に序を正して論ずれば、これだけで優に一巻の書を爲すであらう。只今は極めて簡明卒直にその核心を指摘するに止める。

第一、國體内部生命の機構よりの證明。

國體の精華は、教育勅語の聖訓に示さるゝ通り、「忠孝、億兆一心」に盡きることゝ拜する。「忠」とは、滅私奉公、一死以て君國に殉する至誠であらう。この大精神が父母に對して發現したものが「孝」であると云へよう。

孝の背後には、子心の發現に先んじて己が身を犠牲にしてもと云ふ親心が親の側に發動してゐる。亦忠の存する處にも、臣下の滅私奉公に先んじて、大君の大愛が天日の如くに臣下の上

に注がれてゐる。

「罪あらばわれをとがめよ天つ神

民はわが身の生みし子なれば」

との大御心に對したてまつりて、

「君が代を思ふ心の一寸ちに

わが身ありとは思はざりけり」

と應へ奉るのが吾が日本國體の核心である。

この二つのうち何れかの一つが失はれる時、たとへ日本が全世界を平定し得ても、日本の本質は失はれたのである。また、たとへ日本が永久に一小島の中に蟄居してゐても、この一事さへ天日と光を争ふに至らば、皇國日本はたとへそれが地上にはどんなに小さい一存在であつても、その存在に依つて神國としての重大使命を天壤と偕に無窮に地上全面に完成するや必然であらう。

私慾と放縱に走り易い人間心を持つ人の子等が、君國に對しまつり、一死盡忠の至誠に生かざる。此の不思議なる天的關係は斷じて地より生れたものでない。正しく天的のものでなくて

何であらうか。

かゝる日本國體の中心を貫く生命の道こそ、神の大御心がそのまゝ地に具象したものでなく、他の何處に神國の實體があるのであらうか。

而して、此の一大事實を實證すべき天的眞理こそ聖書の福音的眞理である事を私は見出す。

聖書眞理を要約すれば、次の二句につきるとも言ひ得るであらう。

(一)「それ神はその獨子を賜ふほどに世を愛し給へり、凡て彼を信するものゝ亡びずして永遠の生命を得ん爲めなり」(ヨハネ傳三の十六)

(二)「主はわれらの爲に生命を捨て給へり、之によりて愛と云ふことを知りたり。我らも亦兄弟の爲めに生命を捨つべきなり」(ヨハネ第一書三の十六)

即ち知る、神様と申す御方は、御自身の生命も惜しまず、之を賜ふほどに人々を愛してゐ給ふ御方である。此の大愛を仰ぐ時、人の心は己が生命を捨て、滅私奉公、一死盡忠の誠に生きざるを得なくなるのである。

以上の生命的結合に於いて、神と人とを結ぶものが、即ち聖書の啓示する最大最深の神の眞理である。この一大生命の中に萬人を生かしむる具體的な神の愛の顯現が十字架であり、復活

である。

以上の關係に入る事、それが神の要求である。是れが即ち天地宇宙に於ける最大眞理の生命的顯現である。この一大事實は苟も聖書を深く學びし者の悉くが萬代不易の神の眞理なりと確信する處であり、人類の持ち得る世界最高の天的光である。

果して然らば、神の光たる聖書の示す最高の生命が、そのまゝ寸分の狂ひなく、日本の皇室と臣下との關係に具象し、國體の生命的核心となつてゐる一大事實を仰げば、誰か世に一人たりと雖も、吾が國體が天より出で來りし天授のものであるとの事實を、否み得る者があるであらうか。

聖書が神書たる事實を疑ふ不信の徒輩ならいざ知らず、苟も聖書を神の最大權威として信奉する歐米人の前には、『皇國日本は神國なり』と叫ぶ此の一大提唱が、以上の一事に依つて立證し盡して餘りあると私は信ずる。

(四) 神國の科學的立證

次に、聖書を神書として未だ信じ得ずとも、近代科學を唯一の權威として信奉する學徒の前

には、次の一事を言明するだけで、實に、皇國日本が天の眞理をそのまゝ地上に具象せし神國であるとの第一印象を深めるであらう。

即ち最近科學は遂に物質の外殻を叩きこわして、その内部構成を仔細に探究し、遂に彼等が把握し得たる最深の一大眞理は次の事項である。

「物質は電子より成る。電子は物質に非ず、「力」である。而して力の奥に「生命」がある。」
「物質より生命が生ずるに非ず。生命より物質が生ずるのである。」との原理である。

以上は近代科學が立證する宇宙の眞諦である。これこそ神界實相の具現化である。

然り、而してこの眞諦、この現實がそのまゝ肇國の太初より國民の心を照らし、此の光のもとに天地萬有を心視して來た國民があつたとすれば、その國民こそ神より出でし事を立證するではないか。この原理こそ日本古典を一貫する日本精神の最大原理の一つではないか。何と云ふ神秘であり、何と云ふ天の攝理であらうか。

神自らが聖手もて創めし國ならずして、どうして斯かる神の叡智が地の人の心に臨み得るであらうか。皇國が實に、人の始めし國ならで、神の大生命が具象せし神國なる事を知りうるであらう。

(五) 歴史哲學よりの證明

なほ第三に、日本が神國である事は、その歴史性について見るも容易に肯定し得る事實であると信ずる。

神よりか？ 人よりか？ との疑問に對して明快なる斷案を下したる一例が聖書の使徒行傳五章に例示されてゐる。以て他山の石となすべし。

イエスの昇天後、弟子達は聖靈に満たされてイエスのキリストなる事を證詞した。

然るに、當時の祭司、學者たちは、ペテロ、ヨハネの言行が神より出でず、人々を惑亂するものとして法を以て處斷せんとした。その際一教法學者ガマリエルは言つた。

「然れば今汝らに言ふ。この人々より離れて、その爲すに任せよ。若しその企圖、その所作、人より出でたらんには自ら壞れん。若し神より出でたらんには、彼らを壞ること能はず、恐らく汝ら神に敵するものとならん」(使徒行傳五の三八—三九)

實に千古の名言である。此處に世界歴史を貫く通則がある。即ち「人より出しものは壞れん。されど神より出しものは壞る能はず。若し之を壞らんとせば、汝ら神に敵するものとならん」

との一言である。

若し日本の肇國が神より出でずして、人より出でたらんには、榮枯盛衰の世の波は遂に日本を間もなく時の流れの底に没し去つたであらう。されども、實に神より出しものなればこそ、人之を壞る能はず。皇統連綿、萬世一系の日本歴史は炳乎としてその光を月日と争ふ。この事實こそ皇國がそのまゝ神より出でし神國なる事實を明示する天的第一大實證でなくて何であらうか。

然も、畏れ多き事ながら、皇室が武家政治に對して、より優勢なりしが爲めに存續せしに非ず、二千六百年の悠久の時代を通じて累卵の危機を幾度か經過しつゝ、國屢々危き時、天佑神助を以て護られ、遂に現代の隆盛を見るに至つたのである。少しでも歴史眼を有する者の前にはこの一事、良く以て皇國が神國たるの實を立證するに足ると思ふ。

以上、簡明に論せし事實について見るも、明かに皇國日本が特に天より地に遣はされ、全人類救済に係はる天業の爲めに備へおかれたる神の器うつはである事を明白に信じ得るであらう。

さらば、神は我が皇國に如何なる役割を附與し、何を我が皇國に爲せよと命じてゐ給ふのであらうか。

我らは次に、この重大神命について天の光を仰ぐであらう。

皇國に命ぜられし世界的特殊使命

(一) 神政王國の完成

神が日本に授け給ふた天的役割は、「地上に於る神國具現」であると仰ぐ。靈的神國完成はユダヤの地に於てイエスに降つた。人間性への大悟徹底は印度の地、釋迦に降つた。「道」の確立は支那の地、孔子に降つた。實に皇國日本に降臨した特殊神命は、地上に於る神政王國の具現であつた。

(27)

此の皇國への大任は曾て他の諸國民に降つた神命に比すると、最も困難なる天業であると云ふべく、皇國は全世界中特異なる神命の國であると云はねばならぬ。

曾てイスラエルの民族に使命づけられてゐた神國の内容に二種の異なるものがあつた。即ち一は祭政一致の神國樹立であり、第二は靈的神國の完成であつた。この二者の關係は言ふ迄もなく、先づ第二の靈的救済が個人の上に完成した後、第一の祭政一致の神政王國が具體化さるべき筈のものである。舊約の歴史を見ると、祭政一致の神政王國の樹立はダビデ、ソロモン王朝

の後に南北朝に分裂し、今から約二千六百年前に中斷するに到つた。爾來イスラエル民族へは靈的神國樹立の一路が残され、その天業は遂にキリストの十字架と復活に於て萬民萬國の前に完成せられるに至つたのである。

而して、イスラエルの民から中絶された神政王國は、計らざりき、今より二千六百年前、東洋の東端 樞原神宮の聖域より再び發足するに至つたのである。

即ち知る、皇國日本に懸けられた神命は一つに神政王國の完成にある。この天業完成に必要な他の諸材は既にイスラエルの民及び印度と支那の兩民族を通じて準備され、また歐米の科學文明により物質文化の準備は成つた。

皇國日本は是等一切の武具を自由自在に活用し、皇國に降れる天的特別使命を遂行する一事につき、これが我ら皇國の民が地上に生を許されてゐる唯一無二の絶對的目的であると知る。

(28)

(二) 皇國使命の重大性

地上生活を穢土として西方に淨土を欣求することは凡庸の民も是を難しとはしない。又、政治、經濟、産業から分離して、單に心靈の救と靈魂の幸福を體得することも、さまで大した難

事でもあるまい。けれども、靈的救済と併せて、この現世に神の王國を樹立する一事は正に難中の難事に屬する天業である。然り、而してこの使命が我が皇國の上に天より降下し、この大使命のもとに肇國されたのが即ち我が皇國であつた。斯る難事も全國民が君民一體、億兆一心となり、生命を的にこの大任を、只信受して神の大能の中を歩まば神は此の難事をも、いと容易に遂行する道を我等の中に備へて居給ふに違ひない。天孫民族の依つて以つて起つべき唯一絶對の道がこゝにあると信ずる。

斯る重大なる使命は全人類の歴史上、何れの地にもなかつた。未だユダヤの地にも、印度にも、支那にも、はたまた歐米にも降下しなかつた天命である。これこそ乃ち皇國日本に運命づけられた特別の「皇運」であると言ふべきであらう。

皇國日本は斯る特命のもとに肇國せられた。而して、爾來幾千年の歲月を奇しくも皇國は天佑神助のもとに育まれて來た特殊神國であつた。

斯く考察する時、歐米に發達した基督教に於ても使命づけられず、また過去の佛教と儒教に於ても企及し得なかつた特殊使命が皇國日本の上に君臨し、その遂行を切々迫まられてゐるのが即ち現代の我等が目前に見る此の日本である。

既に現在の全世界は基督教、佛教、儒教等の各宗教が宣布されてゐるに拘らず、皇國日本が新しく四海に皇道を宣布し、その具現に邁進しなければならぬ理由が茲にあるのであると私は信ずる。

八紘爲宇の宣言も、天業翼賛の誓も、一つにかゝつて皆此の天來の特殊使命遂行の爲であると知る。

(三) 天の保證

次に、なほ一言申し述べておきたいことは、斯る特命降下の國柄である事に間違ひ無いならば、必ずやその使命遂行上必要な原動力が既に神より國家の内部に備へられてゐなければならぬとの一事である。

たとへ如何に肇國の事實に、神國としての輝かしい歴史があつたとしても、假にその國の内部に是を遂行するに足る生命的要素の準備が欠けてゐたとするならば、果してその使命が天より來臨した眞實の物でありしや否や、大いに疑はざるを得ない事になるであらう。

此の疑問は當然起るべき筈のものである。是に對して、眞實、皇國日本は神ながらの天授國

であつたのだとの斷定を下し得る保證が伴つてゐる事は何と云ふ感謝であらうか。皇國の内部を靜かに凝視する時、この神命を完ふするに必要な力は、餘りてなほ餘猶綽々たるものゝ潜在する事を知る。

その力の第一が、即ち、「忠孝の精神」である。こゝに神的生命が躍如として顯はれてゐることを私は見つめる。

嘗に夫れのみではない。肇國以來日本には神國の名にふさはしい一つの天的思潮が國民の下に一貫して居る事を見る。實に、日本は思想の上から見ても、歐米諸國の群山に、一頭地を抜く富士の靈峰であつた事が知られる。

私は此の萬國に聳ゆる日本思想の基礎となるべき生命的動きに就て尙も一言しておきたい。

(四) 物心一如の黒潮

古典を一貫する日本思想の特質は、物心一如、現幽一體、信行一致の雄渾なる神通力である。ギリシヤ思想を母體とする歐米思想は何處迄も對立關係に拘泥して、甲は甲、乙は乙と峻別しなければ止まず、甲乙兩者を貫く一元の源泉に立つ事が彼等には極めて至難であるかに見え

る。

故に彼等は物と靈とを嚴重に區別する。又、生と死とを對立的に峻別する。何事につけても繩張を嚴重にし區劃線を定める。彼等には兩者を越えた世界に迄自らを高揚せしめ、その世界に立つて兩者を見下す事が仲々にむづかしい。

また支那思想でも、生と死とを峻別して居る事は生者必滅の印度思想と大差がない。

處が、日本思想の特質は、いつでも不死の世界をみつめてゐる。「物」の中に何時でも「靈」を見る。又常に「靈」を現實の「物」を通じて表現せんとする。

古代の日本人には、たゞ生のみがあつて死は無かつた。肉體の死は只肉體が不可見の隱身になるだけの事だと考へ、決して死に依つて特殊變化があつたとは思はない。現幽一如の信仰界の奥義を茶飯事の如くに彼等は常識として具有してゐたのである。

更に、深甚なる注意を引くべき驚嘆に値する事實は、我等の祖先は正しく宇宙の三位一體觀を言あげせずして味得してゐたやうに見える事である。

古典に現はれた處を見ても、天照大神を信仰する内容は、先づ第一に、歴史的御存在として

の一人格であり、同時にその御本體としては隱身の産靈の神を靈仰する。更に一飛躍して日神としての天照大神を拜してゐる。

祖先は決して三つを別々に考へてはゐなかつたと古典學者はその研究を語る。何時でも三者が一體に觀ぜられる位置に彼等の靈魂を据えたのであつた。

又、佛壇に向つて父母の位牌に合掌する時でも、同じく三位一體の態度に於て拜すると思ふ。眼前に見えるものは、位牌にすぎない。然し、合掌する者の心には父母の靈を感じる。又父母の靈は先祖代々の靈にも通つてゐる。かく、位牌と父母と祖先の三者が一體となつて、位牌と偕に合掌する者の前に現前して來る。

手近な話だが、庭の草木を見る時でも、單に眼前に繁る草木だけではない。同時にその生命に觸れる。その生命に觸れる人の心には、又草木を斯くあらしめてゐる天地の本體たる活ける神の靈をも野の草木の中に拜する。其處に何のこだはりもない、幼心の素直さを以て、この三位一體の幽玄極まる神の實有の世界が日本人の靈魂の中に來臨して居る事が知られる。

歐米に於ける最も深遠な基督教神學は三位一體の神學である。肉體にある「イエス」と「聖

靈」と「神」との三つが一體である。即ち父、御子、御靈の三者は一つであると云ふのである。これが基督教神學の中樞軸である。この三位一體説ほど理解に苦しむ學説は無いと西洋の人々はこぼしてゐる。かほど迄に至難な靈界の秘義を肇國の太初から何の苦もなく之を體得し、この秘義を自由自在に活用して、凡百の事象を達觀したのが我等の先祖であつた。天の靈光が豊かに臨んでゐなければ此等の事實は有り得ない事であらうと思ふ。

即ち知る。

地上に神國を具現すべき大使命に立つ特選の國民にとり、その第一資格は地にあつては、天の事象を直視し、又天の事象を直視しては直ちにその眞實相を地上界に具現する能力を持つ事である。これが第一の必要條件である。現幽一體、物心一如、靈肉一體の神界に安住し、天國の雛形として地に與へられたものこそ、我が皇國ではなかつたか。

此の世にありて既に天を繋ぎ、天の解く處を地に解き得るものこそ、皇國の中に一貫する神的生命ではないか。

皇國の民には「信」は即ち「行」である。行ずる處は即ち信ずる處である。信行一如の最高

峰の第一線を濶歩する民こそ我等皇民の本領であつた。
さればこそ、神國日本にあつては「忠」は「信」の極致であり、「死」は「行」の極致であり、「誠」は「神の愛」の極致であつた。

(五) 時は來れり

天國を遠く西方淨土に欣求する者にして、どうして神國を地上に具現し得られようか、また地上をサタンの跳梁する地とのみ見て、樂土を千年王國にのみ待つ思想の持主に、どうして天國そのまゝの神政王國を此の現有の地上に實現し得るであらうか。

どうしても、天國その儘を地上に具現する有資格者は、神慮奉行の神命を奉じ、國家をあげて、その使命に不惜身命、勇往邁進する神國の民でなくして、何れの國の民であらうか。

天に聖意の成る如く、地に神の國を具現する一つの國が太初より定められてあつた。彼の時未だ至らず、過去二千六百年は他より輔導を受けたが、今や時期は熟しつゝある。

目を舉げて天の聖座を仰げ。いよ／＼皇國本有の特命の爲めに起つべき時こそ、今ではないか。

救

(一) 民の聖化

神國日本は、人よりに非ず、己れよりも非ず、神自ら特別な使命を授けて肇めし國である事は、以上の論述によつて明白であらう。然らば、世界無比の神國であればあるだけに、全世界何れの國民に比しても、吾が皇民は神と人との前に神々しい人格を持ち聖化されておらねばならぬ民である。

單に、歐米諸國に比して劣らぬと云ふ程度であつてはならぬ、遙に彼等に優つた民であり、且つ、その靈性の聖化に於いては、到底彼等の追従をゆるさぬ程度に高度の神化が成就されておらねばならぬ國民である。

我らが現有する物質文明の賜物は、是れを歐米から受けた。けれども、靈的賜物は我らから最高級のものを彼等に與へるものであらねばならぬ。かゝる天命におかれた國民こそ皇民であつたのだ。

處が、現在我らの實狀はどんなであらうか。神靈の具象國家に適はしい聖化が成りつゝありや、否や。自ら顧みて冷汗全背を濕ほさすにおられない。刻下の急務は何と云つても全國民を「神民」の資格に取り戻す事である。

然らば、どうしたら、神國の民にふさはしい「神民」に取り戻され、聖化の實が擧るのであらうか。この一事こそ將來に向つて皇國の興廢を決すべき最大要件であると私は信ずる。

その筋道について、此處では單に過去二千六百年の間に發達して來た歴史的展開について、その要旨を述べるに止めておく。

一、救とは何か。

二、救 被。

三、大悟徹底。

四、實踐道德。

五、福音的信仰。

(二) 救とは何か

救とは、一言につくせば、「地上にありながら天の永遠生命に入れられる事」である。これまで多くの人々が考へたやうに病氣が癒つては「救はれた」と云ひ、貧乏した時に、「救はれた」と云ふ。それらも一小部分の救であるには違ひなからう。けれども、ほんとの意味での「救」と云ふのは、亡ぶべき身が永遠生命を興へられる事を云ふのである。今迄通りの無意味な生活をしておれば、どうせ醉生夢死、滅亡だと思ふ時に、信仰的に或る心の轉換が行はれる。その時からは 今晚死んでも最早や遺憾はない。永遠に神と人との前に生きて行かれるのだから、と云ふ新天地の中に新生した心的状態を云ふのである。

之を卑近な例で云へば、果しも知らぬ大海原で、あのまゝ浮きつ沈みつしておれば、乾度半時間もたゝぬうちに、死體になつてゐたに違ひない自分を知つてゐる人が、ふと氣づいて見ると巨船の甲板上に擔ぎ上げられてゐる。今迄水中に漂ふた身が今は荒波を切つて走る大船の上に乗せられてゐる。疲れた自分には、到底幾千哩の大海原を泳いで歸る力はない。けれども、大船の上に在る以上は、もう大丈夫、必ず日本に歸られる。まだ岸邊は見えないが、必ず上陸

が出来るに違ひないとの確信と大安心に生きる。かゝる大確信のもとに刻々彼岸をさして日々信仰の巨船に乗つて勇往邁進して行く實生活が「救はれた生活」である。

かうした神の靈的大船を見出し、それに塔乗し、任せきつて神の義と神の國とを求めて行く。かゝる人々は必ず無くてならぬ日常の糧をも與へられ、智慧も健康も神の聖業を扶翼しまつるに必要な世の一切が與へられてくる。そして、醜い己が身にも神の能力の傾注を受け、心から湧き来る歡喜と感謝の中に生涯を献げる身となる。これが救はれた後の信仰生活なのである。かく神に信従し、神の業を行する人を神の民と呼ぶのである。

X

X

X

救はれない人は、自我に生き、救はれた人は神に生きて行く。この一つで人生の明暗がきまつてくる。

だから 救はれた人はたとへ病氣や困苦の中におかれてゐても、天國が彼の中に宿つてゐるが、救はれない人は金殿玉樓も地獄に變つて了ふのである。神國日本の民は何としても悉く救はれてゐなければならぬのである。聖化されておらねばならぬ民こそ皇國民である。

一寸注意しておきたい事は、神々しい人格とか、聖化された人と云へばよく解るが、それは自己の立場からの言ひ方であつて、天の側から見れば、一旦神の民として選ばれたものが、神慮奉公を否んで自己中心の我儘放縱の罪の生活に墮落する。かゝる墮落の民は、使命なき民よりも更に／＼嚴罰を受くべきものである。罪さるべき身が本心に立ち返りて神の子に復歸し、更めて神の靈能を受け、天壤無窮を繼ぐ有爲の民に回復される事を「救はれる」と云ふのである。

(三) 罪 と 死

それでは、どうしたら救はれるのか。

「救」の道を述べる前に、是非とも此處で深く反省しておく事は、神の前に私たちはみな罪に穢れてゐるとの反省である。

一體、人の心と云ふものは、神の光がのぞき込む窓なのだ。この窓が正しくあいてさへおれば、現在の自分が如何に穢れに充ちてゐるかにすぐ氣がつく。かく悟つた後に、またすぐわかる事は、「罪の價は死である」との事である

どんなに丈夫な人にも、「死」は早晚必ず彼に迫つてくる。そのやうに、罪のある處には

必ず靈の死が約束されてゐる。

靈の永生が獲得されてくると、單なる形態の變化である肉體の死は、怖ろしくなくなる。死が怖いのでない。實は、罪が恐ろしいのだ。

だから、人の心から罪を洗ひ消す工夫さへ發見されるならば、死の問題は容易に消えて了ふ筈である。

X

X

X

神國日本の民として、先づ第一に學ぶべきは、神に對して何が罪であるかとの事である。

罪の真相を一言に盡せば、「罪とは神に反逆する自我意識である。」と言へやう。人間には神の誠に反逆して、俺が、俺がと云ふ自我慾が誰人にもある。この自我慾が罪の本質的實在なのである。

この自我慾を殺して、神の大御心に絶對服従する忠節の心になる事が救はれる状態になつたのである。罪の問題が處分され、長く蔽ふてゐた心の黒雲が豁然と拂ひ去られる時、明鏡に大空の明月が輝く如く、人の心には神の光が臨んでくる。ほんとの「人」としての第一歩は此處から始まるのである。

人生は要するに、自我の醜い殻を脱ぎ捨て、神の靈の新芽を發芽させる場所が人生であると云へやう。かく新生し、神の靈に導かれ、神と偕に歩む生活、それが神民の生活である。

(四) 信 仰 道

元來、罪の意識と神の光とは正比例するものである。神の靈光が強くと臨んでくれば、くるほど、罪の穢れを深く意識し、何を措いても是を洗ひ去らねばならぬ心に成る。即ち神に近い者ほど罪が深くわかつてくる。世の中には、往々「私は一度も罪を犯した事がない」と頑張る人々が少なくない。若し罪を意識しない人があつたら、その人こそ神に背を向けてゐる人なので彼の中に神の誠がない事を自白してゐるのだ。靈の黒白をも見別けかねる暗黒におかれてゐる者こそその人である。罪を悔い得る心は、實に尊い人の特權である。

神國日本の民は、何れの國民よりも深く罪を意識し、刻々不斷に凡ての罪から洗ひ聖められておるべき民だ。

古來、肇國の太初から我が國民が上下心を一つにして行じたものは、褻、被であつた。印度では、日本の褻、被の代りに禪定三昧があり、大悟徹底して、一切の迷を拂ひ除ける工夫を積

んだ。また支那では、道德の徳目を嚴重に實踐に移し、不徳不義から自らを淨めんとした。ユダヤの地にあつては、人間は元來、道德的破産者である事を能く承知し、キリストによる罪の赦を信じ、救主に在る神の恩寵により、罪の潔めを信受して後、聖潔を具現する信仰道を歩んだ。

以上四つのうち、第三の倫理道德實踐の方法は明治、大正の兩時代に向け、日本全國をあげて總努力した處であつたが、信仰ゆきの倫理道德の修養は、遂に半世紀餘に亘つて殘念ながら失敗に歸した。殘る道は禊祓と大悟徹底と十字架信仰の三つを何如に爲すべきかである。

日本學の基礎體系をなす根本原理から云へば、言ふまでもなく以上の三つを打つて一丸となし、靈界の大所高所に立つて堅く信仰の窮極境地を把握すべきが、眞個の日本人の行くべき道であると信ずる。

而して、明治大正兩時代に努力したる實踐道德の目標は、その根源たる信仰生活に國民が徹底する時、おのづから自然に結實すべき果實として實現されるであらう。

故に、儒教に於いて開示された諸々の修養道德の徳目は、信仰を行じた後に來るべきものとして、我らは夫れを期待しつゝ先づ第一の信仰道に徹すべきである。

(五) 禊 祓

然らば、第一の禊、祓によつて何故に人の罪が洗ひ去られるのであらうか。

此の詳細については、この小著に於いては盡し得べくもない。ただ鳥瞰的考察を示すに止める。もとく日本民族は、神の聖を直覺する天分をゆたかに附與されてゐた。だから、祖先は極度に穢れを忌み嫌ふた。特に、そのうちでも死と血と火の三つの穢れを忌んだ。これが禊、祓の起原であると云はれる。

而して禊祓は爾來三千年の歴史を経て二階段を經過し、今や第三の階段に入らんとしてゐると私は思ふ。

第一段、外淨時代。

第二段、内淨時代。

第三段、靈淨時代。

外淨とは、水に浴して身體の外部を清める行事である。内淨とは、心を清める行事である。今私の言ふ處の靈淨とは、靈魂の一切の穢れを洗ひ聖める事である。

外淨は伊邪那岐命時代の太初から始まり、内淨は足利時代に盛に唱導された。靈淨は、今我らが期するものであり、今後の新領域に屬する。

今日迄の歴史の内容だけを以て禊、祓を觀るならば、特殊な天分の人は別として凡人には或る限度があり、それ以上に到達するにはなか／＼困難なる憾がある。かるが故に、古來惟神道に禊祓がありながら、奈良朝以後あれほどに佛道の大悟徹底道が盛に信奉せられるに至つたのである。また徳川時代には儒教に依る修養道が盛に行ぜられたのも、未だ禊祓の眞生命が充分に發揚されかねてゐた爲めである。私はひそかに思ふ。古來の禊祓は、昭和の現代に及んで聖書が開示する聖靈による水の洗ひを日本式に靈驗する事に由り、こゝに一段の飛躍を見るべきだと期してゐる。

(45)

(六) 罪の解除四則

一體、罪の解除に就いては、之を理論的に言へば、次の四つの道の以外にはない。また古來全人類が踏み來つた方法も結局次の四つに盡きる。

第一、罪の忘却——一般の人々が踏襲した道。

第二、積善による罪の消除——善良にして無宗教家の踏みし道。

第三、罪の否定——近來赤化思想の道。

第四、罪の赦の信仰——十字架の道。

このうち前三者は結局失敗に終つた。ただ第四の罪の赦の信仰に立つた人の靈魂は、己が罪より解放されるに至つたのである。古來日本に行はれ來つた禊、祓も結局は罪の赦の信仰を、行事のうちに言あげせずして味得し、「あな天晴れ！」の心境に體達したものであらうと思ふ。之を要するに、禊、祓の行事は、結局、罪の赦しの信仰の確證を握る事に重點があり、更に進んで靈的、新生の靈驗に入る事に歸結するものと私は思ふてゐる。

禊、祓を行じつゝ、罪の赦の信仰に確立し、聖靈の降臨による神人歸入の妙境に入る處に、皇國の將來に對する一道の巨光が仰れる。

(46)

(七) 大悟徹底道

大悟徹底とは自我の克服である。所謂、小我に死して大我に生くる捨我精進の道である。たしかに、此處に自我に死して宇宙靈と偕に生くる一つの白道がある。けれども、よくこの難路

を突破して高峰によち登り得るものが幾人あつたのであらうか。故に、昔の人々は出家をなし、全魂をあげて集注し、生涯の事業として此の道を求めたのであつた。私は茲に幽玄深遠なる巨光が潜んでゐるであらうと期待する。けれども、御互の如く現在、日毎の生活と闘つて休息の暇さへ見出しにくい複雑繁忙の我らに對して、此の大悟徹底の道を萬人に要求する事は容易の業ではない。忙しい職業生活を營みつゝ、眞に神の子とせられ、神と偕に歩む皇民の大道に歸るべく現代に應用され得る大悟徹底道を今の私たちは欲しいのである。

古傳のまゝの大悟徹底道はむしろ少數の指導者たちが之を己が身に體達して、その奥義妙境を一般化して國民全體に普及すべき性質のものであらうと私は見てゐる。

(47)

(八) 福音信仰道

福音信仰道とは、聖書眞理による萬人救済道である。人間の側から集積して行く修養道は、たとへば堅木を摩擦して發火せしむる努力に似てゐる。處が、福音信仰の道はスウ*ツチを捻じて電燈をともし工夫に似てゐる。前者は自己の鍛鍊で自熱を發現さすのであるが、後者は熱源が他の水力電氣にある。それを自己の心と云ふスウ*ツチの位置をひねり變へて電力を心の

内部に受け入れるのである。これなら凡庸多忙な私どもでも容易に出来る事だ。此の消息を傳へ、この救済道を世界に開示したものが基督の福音信仰である。

だから、基督の十字架道は、以上の禊、祓や大悟徹底の道と對立するものではない。種子と陽光の如く互に相補足して天地の生命を地に成就せしむるものである。前二者は人の側の道を備へ、後者は天の側の道を開示する。

故に、禊祓を行じ、更に禪定三昧の妙境を體得しつゝ、十字架道の中に開示さるゝ神の大生命を信受するならば、それこそ鬼に金棒である。そこに「救」の保證が発見せられ、更に天より迫り來る靈能に豁然とつながれる。かくして、神の大生命の葡萄の幹につながる地の小枝としての自分を見出し、天地脈々相呼應する。こゝに始めて神の聖靈を宿す宮として聖化の第一歩が實際に踏み出されてくる。

この天地脈々相應の明確な自覺が内證される時、天の光明はその人の胸中に宿つてくる。かくして神の子としての新生が具現しそめるのである。

この十字架道は、人の器の大小深淺、賢愚に拘はらず、神の側より臨み來る聖靈を受けるのであるから、如何なる凡庸な私共でも一人残らず悉くが尊い神の救に加へられる。實に深奥に

(48)

して特異なる神の恩寵の道が此處にある。更に、人の側よりの修業錬磨が深いだけ、それだけより高度の靈能が與へられる事は言ふ迄もない事である。一言にして盡せば、行ずるは、人の分であり、興へるは神の分である。十字架道とは、之を要するに、天と人とをつなぐ靈の針金につながる事である。之によつて天の靈源は人の胸中に臨み、聖化が成就されてくるのである。

(九) 結 語

皇國の民が、神の民たる爲めには、第一に各自の靈的、新生を要する。この國民的、新生なしに、神國の完成は不可能である。

さらば、物資の供給よりも、産業の擴充よりも、はたまた、兵器の強化よりも、更に神國日本にとりて緊要なるは、各自の靈的、新生の成就である。皇國の神國たる確信に立つ神慮奉行の實は、全國民の靈的、新生の後に具現されて來るであらう。

天 業 翼 贊

(一) 神國の内容整備

正しく日本肇國の大使命は、地上に神國具現の大任であつた。

さらば、神國樹立に係る天業の内容とは何であらうか。

第一は祭政一致、君民一體の實を完備する事である。

第二は、皇國を一つの雛形として全世界諸國を、この根本原則の下に整備する事である。かくして、夫々の一國家が一單位となり、神の義と神の愛に生くる時、その時、始めて待望の世界平和は地上に實現されるであらう。

その爲めには、先づ初穂たるべき皇國日本が、大君の統治下に億兆一心、神に仕ふる信仰道を完成すべく、また、かくして、「神の誠」を八紘に輝くほどに國內に充實する事、是れが天業翼贊の第一着手であらう。

水はその水源より高くは登らない。皇國の水源が、現在の如く濁流滔々、低迷混沌たる状態

にあつて、どうして東亞に對して眞の天業が期待し得るであらうか。先づ源を聖めよ。然らば東亞の救済と世界指導は其の途に就くであらう。

實に、今は國民のあらゆる階級層に對して靈性の再教育を要する時代である。物資の統制以上國民思想の根源たる信仰界を統制し一せしむる必要に迫まれてゐる時代である。

既に或る特定の既成宗教を信奉してゐる者と雖も、今一度、皇國の特殊使命に徹せしめ、然る後、皇國信仰を補佐註釋し、神國日本の生命的肥料としての立場に立ちて各自の分擔に歸らしむべきである。その爲めの再教育が今の宗教家一般に要請される。私は物資統制と同時に上述の根本原則に則つて、宗教信仰の統制を國家が斷行する事を要望する。今こそは、實に、皇國独自の使命に歸り、全國民を擧げて總體修練を要する時代である。

(二) 誠 と 愛

神國日本が立つ精神的礎石は、何と言つても「誠」の一字に盡きる。「誠」は國民生活の出立點であり、またその終結點である。

誠は、國民生活一切の根幹である。ただ遺憾な事は、この誠が、今迄餘りにも道德の一徳目

として取扱はれて來た事である。皇國の生命たる「誠」は、實に、天地宇宙の大生命そのまゝが、地上に具象したるものである故に、「誠」は神の具現である。

日本に於いては、實に、「誠」は神の見るべき像であつた。即ち、日本の「誠」は之を道德的に取り扱ふにあらずして、信仰に於ける最高の表現として仰ぐべきが、「誠」の本來の面目であつた。

この意味に於ける「誠」から、「信」と「望」と「愛」との美花が咲いてくる。

×

×

×

從來の通念から云へば、單に「誠」と云へば、兎もすると守る消極の態度に陥り易い。「誠」が積極的に働きかけて行く處に、信仰的に言ふ「愛」が發現してくる。愛は神より出づ。愛ある者は神を識り、愛なき者は神を知り得ない。人の誠心に、神の靈能が働きかけたものが、乃ち愛であるとも云へやう。

日本國民の根底をなす「誠」が、生命的に伸びて神の愛にまで開花してくると、そこに永遠の「希望」が湧き、その美果として「信仰」がおのづから結んでくる。この心境に立つて、聖書のヨハネ第一書三章と四章又はコリント前書十三章を讀むと、聖書の一言一句がそのまゝ日

本魂の血となり、肉となつて躍動してくるであらう。

(三) 誠と悔改

「誠心」が、天の靈を受けると、それが神の愛の世界を開いてくれると私は言ふたが、同じく「誠心」が神の靈光を受けた後、己が心を見つめると、そこに必ず懺悔の心が湧いてくるのを禁じ得ないであらう。「神は靈なれば、拜する者も靈と眞を以て拜すべきなり」とは聖書が示す靈界最高の眞理である。

神様と申す御方は、偽り心で拜んだのでは、どうしても御目に掛れぬ御方である。智慧や理性でない。「靈」と「誠」とを以て仰がねば拜し得ない御方である。

誠が人の中に目ざめてゐれば、神靈臨在の特徴として、いつでも人の心には、懺悔と悔改心が與へられるものである。懺悔のない人、悔改め得ない者は、死んだ人であり、腐つた心である。人のほんとの尊貴は、地位名望ではない。眞心からの懺悔心、悔改心にある。

神と偕に歩む信仰生活の第一屏は、此處にあるのである。悪魔は是を隠して見せないやうにと常に努めてゐる。神國日本の民は、この神界の急所をぐつと堅く握り締めて、この第一の屏

から奥へ奥へと進むべきである。

くり返して言ふ。誠の心が眞の懺悔と悔改心を生むのである。而して神の最も喜び給ふものは碎けたる靈魂であり、己が罪に泣きつゝ神に依りすがる心である。

(四) 誠と祈禱

懺悔と悔改とは本質が一寸違ふのである。「私が悪るかつたのです」と自分の非を悔ゆる事は懺悔であるが、悔改は、自分の非を悔ひた後に、どうしても之を改めたいとの念願の起こることである。

處が、此處に今一つの大切な靈界の事實がある。夫れは、「悔ゆる心は自分にあつても、惡を改める能力は自分の中に無い」と云ふ事だ。この眞理は新進氣鋭にして自惚の強い時には容易に見出し得ない事實であるが、少し自分の本質を眞面目に客観するやうになると、容易に心づく眞理である。

自分の中に、實際に悔い改めて新生する能力のない事を體得してくると、人の心からは「祈り」が湧いて來ずにはおれない、かくして、「誠」から「祈禱」が湧いてくる。

信仰生活のうちで、最も奥深いものは「祈禱」である。

世には、物質の力、財力、智力、學力、さまざまの力がある。けれども祈禱の力ほど偉大にして深遠なものはないと思ふ。「祈り」は、小さい人間を神の無限につないでくれる。「祈り」は、地上生活をそのまゝ天の聖座に引き上げてくれる。祈りほど尊いものはない。祈りは、實に、全世界を動かす力の根源である。

祈りの無い人は、石炭のない汽車に似てゐる。今の日本の社會状態はあらゆる階級層が、まことに石炭のない汽車である。そして夫れが祈禱の無い爲めだとの事にさへ未だ氣づいてゐない人々が多いやうだ。近來、國民がラヂオの合圖で一齊に一分間の默禱をさゝげる迄に導かれて來た事は有難い。現在では、まだほんの形式の域を脱し兼ねてゐるやうだが、更に一躍進して、國民一齊に天の聖座にまで通するほどの祈禱が日本の國土からさゝげられるやうになつたら、その時こそ神的革新は日本から全世界に巻き起つて來るであらう。この日の到來を私は信じ、祈りつゝ之を待つ。

祈禱は神の扉を開く合鍵である。そして、眞の祈禱は眞の悔改から生れてくる事を深く心に

刻むべきである。

(五) 罪の赦の信仰

祈禱の生活を積んで行くうちに、多くの人々が驚くほどに經驗する事は、「天の靈とたしかにつながつたのだ」との靈驗を受ける事である。實は、信仰と云ふ言葉のほんとの意味は、この時から理解されてくるので、それまでは待機時代であり、習熟の時であつたのである。

神の聖靈を受け得た人には、必ず罪の赦しが直覺される。この直覺のない人は、未だ神の靈に通じてゐない證據である。

罪の赦の保證を、神が萬人の前に開示したものが、即ちカルバリ山上の十字架であつた。是れによつて、どんな疑深い不信の者でも、最早や寸分も疑ふ餘地のない迄に信じさせて下さる。實に有難い事だ。かほど迄に神は人の靈を熱愛してゐ給ふのである。私のやうな不信な頭靈も此の神の大御心を仰いでは、信ぜずにおられなくさせられた者の一人である。

罪の赦の信仰が確立してくると、必ずそこに靈的再生が行はれる。どんなに穢れた罪人も、

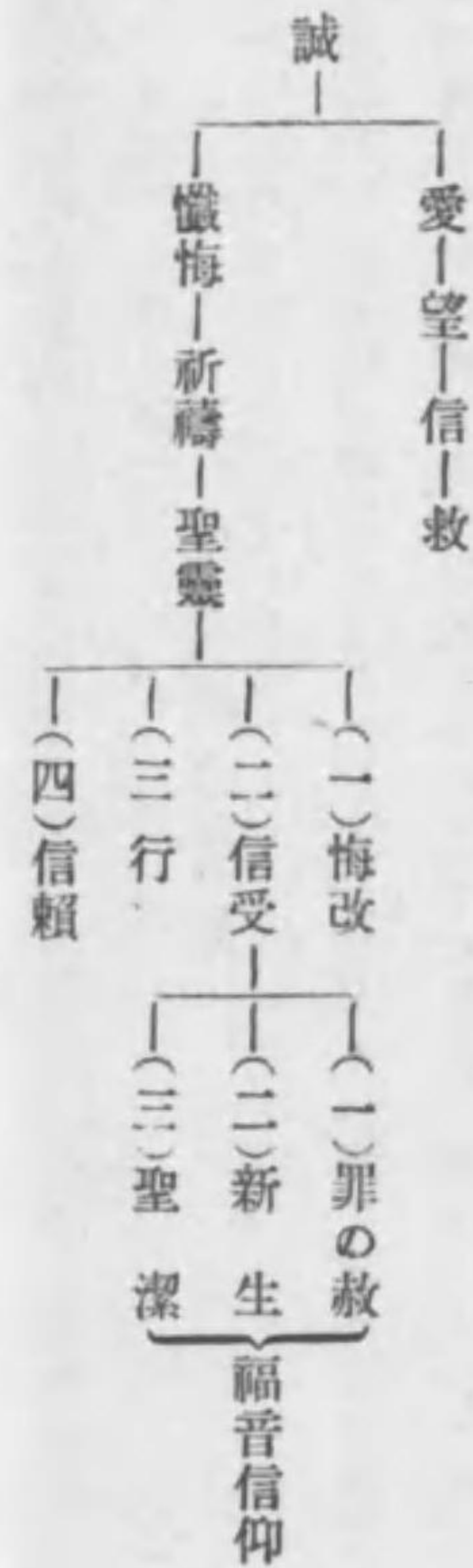
みどり子の幼心に歸つて、神の救にあづかる者になる。

新生後、聖靈は陽光の如くに人の心を照らし、永遠の生命は、新芽の如くに萌してくる。かくして、神の民としての第一歩が創まる。

新生の人にとつては、祈禱は靈魂の呼吸であり、聖言は生命のパンであり、愛の業は心の運動であり、信頼は靈魂の安眠となる。

かく、人の靈魂が神の靈の中に、(一)呼吸し、(二)食ひ、(三)運動し、(四)安眠するならば、たとへ肉體を墓場に送る時が來ても、最早やその人には死がない。永遠の生命は實際に彼の實有となつてゐるであらう。

以上述べた處を表にして見れば次の如くなる。



(六) 信仰結盟

靈的に新生したものは、神の靈にありて互に一體となり、一死以て皇國の使命達成の爲めに結盟せざるを得なくなるであらう。此の信仰に依る結盟成つて始めて全國民の總親和は完ふされ、萬民補翼の實は此處に期し得るものとなるであらう。

神と偕なる信仰に生き得て始めて、神の經綸が悟られる。天地創造の神の目的より、地上人類の創造、乃至は人類歴史の終結に至るまでの神の筋書が地上の我らの心にも歴然と悟らせられる。

眼前に展開する此の日月星辰も、やがては古衣を脱ぐ如く壞滅する時が來る。而して次に臨む新天新地の出現が待望される。この新天新地の成る時、創世の時より出沒起伏せし宇宙の歴史は悉く審判の座におかれるであらう。

天壤無窮の皇運とは、この永遠無窮の神の新天新地にありても、なほ日月の如くに炳乎として輝く『神國』を完成する事を意味するのではないか。

嗚呼、わが皇國日本!! 何と云ふ光榮の國であらうか。悠遠なる神の筋書のもとにかくも尊く定められたる國。これが神國でなくて何であらうか。

この一事を思ひめぐらして、天を仰ぐ時、眼前に輝くものは、ただ神の榮光と皇國の尊嚴。そして我らの重き使命!!

是を信じ、是を仰ぐ我らには、ただ生命を的に、君國に献ぐる一途、これ以外に何物をも見出さない。

くり返して言ふ。

我ら日本國民の往くべき道は、ただ此の皇國に係る神命を信する信仰に堅立し、その爲めに己が身の救を確立して、君國に殉ずる「信仰殉國」の外にはない。

信仰殉國!! 是れ我らが永遠めがけての聖願であり、また我らの光榮であり、我らの歡喜である。

然らば、皇國信仰とは何を言ふのであらうか。以下是を概説するであらう。

X

X

X

皇國信仰概説

(一) 皇國信仰とは何か

皇國民には、皇國心と云へば誰人にも夫れが何を意味するかとすぐわかる。然し「皇國信仰」と云へば、夫れが何を意味するのか、漠然としてわからない人々が多いであらう。これが日本現代人の偽らざる告白であらうと思ふ。

私は敢て言ふ一皇國信仰の方が、皇國心よりも遙に明確にわかり、皇國信仰一つで山をも海に移し得る底力が、湧然と民の心に沸き溢れて來るのでなければ未だ眞實に國体は明徴にされたとはいひ難い。

國体の見方に二つある。第一は現象界から見た國体觀と、第二は原理界から見た國体觀である。第一の現象から見た國体觀は歴史の中に現象として具現した事實を、他の諸外國の國体と比較して互に異なる處を指摘する觀方である。即ち、この第一の國体觀に立つて明確にされる諸點は、(一)歐米は個人主義の國であるが、皇國は國家中心の國である事。(二)外國の統治者

であるとは誰人も保證する限りでない。(二)次は覇道國家である。是は統治者が曲りなりにも自己の立場に理窟をつけ之が最善なりとする自己中心的な信念の下に強力を以て他を排して進む道である。現在の歐洲が夫れである。(三)次は米國の如く民の總意を以て國本となす國である。この事が、最も公平な政治道であるとの信念のもとに政治外交が行はれる。

即ち、以上は欠點多き人間が、自己を本位とし、自己に最善と信ずる處、是が至上道なりと信念して國政を司どる道である。即ち、彼等は人本主義の國家であり、人間的信念に立つ國体である。

以上、諸外國の信念主義に對して、天地の絶對そのものが地上に顯現したる國家がある。その國家は自己の判斷によらず、自己の意志に即せず、天地の絶對者の大御心に信從する。而して神につかへまつる道の一つとして國政を司どつて行く。こゝに信仰に立つ國家がある。かゝる國家こそ人の意志に仕へずして、神の意志に即く國家である。故にこの國を「神國」と呼ぶのである。

信念は人より出する最高目標であるが、信仰は天地の絶對者の意志が顯現する道である。人はこれを靈覺し、之に信從し、之に奉行する。これが即ち「まつり」である。神に仕へまつる爲めの一つの道として政治が行はれてゆく。こゝに祭政一致、神慮奉行と云ふ皇國の特質がある。

故に、この國の統治者は民より見れば最高の統率者であるが、天の聖座から見れば一つの祭司であり、神に従ふ從順なる神の子である。己が信ずる善にもあらず、武力のみにもよらず、民の總意によらず、實に神の大御心に依り、神の誠を具現する爲の存在として國家を見る。かゝる神格國家が一個人の如く君民一体となつて神の道を生活する。此の道が神道である。諸外國を信念の國と云ふならば、皇國は正に國家を一人格とする信仰の國である。

天地の絶對者から見た此の立場、換言すれば靈界の永遠真理の原理から見て、信念の國と信仰の國の兩者の關係は、恰も前者が電燈とすれば後者は天に輝く太陽であると云へやう。

この靈界真理の立場から見て、皇國と他の諸外國とは、根本的にその立場を異にするのである。この第二の靈界の奥に存する兩者の相違が、現象界としての史實の上に巨大なる相違を持ち來してゐるのである。

故に國体明徴は、どうしても今日迄に成された如き單なる現象的史實の相違に止まらず、更に奥に進んで天地絶對者に對する第一原理に於ける相違點を明徴に致さねばならぬと私は思ふ。

この奥妙なる原理界に於ける相違の表現が「信念の國」と「信仰の國」と云ふ言葉の相違になてくるのである。即ち知る「皇國心」と云ふ現象事實は、「皇國信仰」と云ふ原理的關係が生む一の結果である。

故に、我等は皇國心に生くる道をその奥妙の世界へと徹して行けば、遂に「皇國信仰」と云ふ本源に到達する事を知る。

故に、結論として言へば、「臣民の道」の極致は、遂に「皇國信仰」に到達せざるを得ない。即ち、皇國信仰は臣民道の淵源である事を知るべきである。

(二) 信念より信仰へ

古來神道を次の二つに分けた。(一)國民生活の規範としての道德的神道、(二)世界的普遍性の宗教的神道。私の所論の骨子は、今迄國策として唱導せられて來た道德的規範の神道だけでは國民の靈魂に眞の糧を與へる事は困難であると信する一點である。どうしても、宗教的信仰の立場をとる事の必要性を痛感する。而して既に成立してゐる世界宗教の佛教よりも基督教よりも我が神道に更に高度の信仰的内容が盛られ、未だ全世界の何處にも無かつた世界最高の國家的

信仰の高さにまで我が皇國信仰を高揚せしめる事が、刻下の急務であると確信する。而して此の「皇國信仰」の中には基督教の福音眞理も、また大乘佛教の骨髄をも、皆エツキスとしてその中に攝取醇化せられおるべきものである。

一個人が救はれて、それで足るものならば、私は聖書の福音信仰、それ一つで充分であると信じてゐる者である。之れ以上に何物も附加する必要がない。私自身としても、この一つで私の靈魂は溢れるのであるが、私の存在の目的は、斷じて私一個の救の爲めではない。皇國日本をして本來の使命に生かしめる一點に私の存在使命がある。この爲めには私は地獄の火に焼かれても、むしろ、皇國使命の達成を希ふものである。私が皇國福音信仰を絶叫する所以がこゝにあるのである。

論者は言ふであらう。「國体に対する深き信念」と云ふも、また「皇國信仰」と云ふも、共に同じく皇國の特別な史實を信するのだから、兩者とも何れを用ひても、要は言葉の相違で、内容は相等しいではないかと。一見そう見えないでもない。けれども、實際の体験から云へば兩者の間には天地宵壤の大差がある。卑近な一例を語れば、信念は自己の理性の判斷に權威を

置くが故に、幸にも自己に於いて前途に對する希望を持ち得る場合は、勇躍難に赴き、死をも辭せないであらう。けれども、一朝我に利あらず、四面楚歌、絶對絶命、詮ん方盡くる時、信念の人は、それで希望の光を失ひ、落膽自棄せざるを得ない。

かゝる時に單なる信念にあらず、眞の皇國信仰に堅立する者は、如何なる窮地にあり、萬策つきた時にも、なほ信。仰。に。在。り。て皇國への神命を信じ、無限の希望の中に勇躍し得る。たとへ焦土となるとも、神の約束は必ず我が皇國にありて全世界に成就さるゝに違ひないとの確信に立つ故に、たとへ暗黒にとさゝるとも信仰に在りて輝く光明の中を歩み得る。かくして始めて天の力はその人に注がれるに至るであらう。起死回生の神力は、かくして其處に体现し得るであらう。かく信仰に立ち得る時にこそ始めて七轉八起の日本精神は發揮せられ、「斃れてなほ止まず」の精氣が溢れる。かゝる民の存在によりてこそ、皇國は天壤と共に無窮に進展し行くのではないか。

信念と信仰は平時にあつては兩者とも大差なきが如くに見ゆる。されども、いざ、これで人事は盡きた。運命の手に任す外に道なしとせつばつまつた時に、信念は平生の英雄をも懦夫たらしめるが、然し、この時、信仰はかゝる時に、平生の懦夫をして眞の英雄たらしめる。

皇國の本質は、最初より信念の境地ではなかつた。信仰の境地に於て溢れる神の大生命が國に充滿してゐた故に、眞の皇國心の体得者には、たとへ言葉では「信念」と云つても、實は「信仰」を把握してゐたものと私は思ふ。故に、初めから信念とは云はず、皇國信仰或は日本信仰又は天皇信仰乃至は國体信仰と呼ぶべきが至當であつたと思ふ。今後に於いて、強いて信念の言葉を使用せんと欲する場合は「宗教的、信念」の語を用ふればよからうかと私は思つてゐる。

序ながら今一つの事に言及する。それは「理想」と「信仰」との関係に就いてである。

理想とは歐米の如き人本主義國の用語であつて、我ら神命による神國の用ふべき語でない。我ら皇民には國家の目的が、即ち我が目的であり、國家への天命が即ち我が使命であるから、自己に何らの特別な目的があらう筈がない。自分勝手な選擇の自由が自己にないのが、皇民本來の特質である。

我が國は個人が夫々の理想に生くる國ではない。國家の使命に一億一心、生命を賭けて奉仕する國である。

理想は人間が勝手に自己の最善と思ふ所を待ち望む心であるから、自己の立場の變化と共に

理想もそれに應じて變化する。けれども、信仰は神の命に信從する事を本質とするから、神の側に變化のない限り、他の側がどんなに變つても微塵の動搖も許さない。實に「天地は過ぎ行かん、されど我が道（言）は永遠に過ぎ行くことなし。」この一言こそ信仰を徹底的に道破したる言である。

日本人は理想する民であつてはならない。神命を奉ずる信仰の人であるべきだ。世人がよく「私の理想は云々」と云ふ。かゝる言は今後は「我らへの神命は云々」と改むべきである。

「理想に生くる民」を、「使命に生くる民」に高揚せしむべきである。

「理想」より「使命」へ！

「信念」より「信仰」へ！

舊き衣を脱ぎ捨て、皇國本來の天的使命に萬民をして生かしむべき時こそ、今である。醒めよ國民！ 皇國信仰へと。

日本神觀への確信（天つ神信仰）

皇國信仰の内容は少くとも次の五要素から成ると思ふ。

- 第一 天つ神信仰
- 第二 神勅信仰
- 第三 天皇信仰
- 第四 六合開都信仰
- 第五 天佑信仰

(一) 天つ神信仰

「我らは天地おのづからの神を信ず」

皇國信仰の基本は、何としても日本神觀に立つ「天地の神」に對する信仰に歸一する。天地宇宙の實體は「靈」である。天地自らが一個の一大活物である。その生命の働きが、「まこと」として現はれる。靈は自らを物質化して可見の形相に顯現するのが原則である。

物質自身が神ではない。けれども、物質は神靈顯現の一つである。そして高度の靈的顯現が、人間の靈魂である。そのうちでも、靈の顯現は神靈の受肉者たる聖者に於て最高度に達する。我らは西洋式の神人懸隔の立場に於いて神を拜しない。宇宙を神の被造物とは見ないで神の自現と見る。宇宙自らが神の身体であり、宇宙の根本靈が神である。

神は無限なるが故に有限の現宇宙の中だけに局限されず、更に現宇宙の外部にも擴大して萬物を統べ治めておられると信ずる。我らは西洋人の如くに宇宙を被造物と見ない。従つて天地に類く事を偶像崇拜視する西洋流儀の神觀を否定する。

天地に拜し、人を拜する事に於いて、我らは天地の本休たる「神」を拜する。此が我らの神觀である。我らは天地萬象の中に神靈を直視する。而して神靈に觸れ得たとき、靈を靈のままに止めないで、更に物を用ひて靈を表現する。こゝに日本神觀の特異性がある。

我らは物と人とを神から切り離して見ない。神の中に物を見、物を通じて神を見る。我らはもろくの相に於いて唯一の天地の神を目のあたりに拜する。「一神即多神」との言葉を古來から神道が用ひてゐるのは、この立場を言ふのであらう。

我らは、歐米人と同様に「唯一神」を崇める。けれども、歐米人の如くに、この唯一神を父

と子と聖靈の三つに限つて了はし。

我らは萬物を偶像視する偏見に陥らない。父と子と聖靈の三位一体の神をも十分に認めながら同時に、萬物の中に神靈の存在を直覺し、萬物を神の宮として崇める。

そのみならず、我らは天地六合を神の宮（宮處）として聖化せしめんとする。此處に、皇國存在の本然の使命がある。

大切だから繰り返して言ふ。日本神觀は唯一神觀であるが、歐米の如く一体を三位に限定せず、天地六合萬物の中に神を拜し、また天地六合をして神の宮處たらしめる處に、歐米の基督敎と我らの立場との間に根本的な相違があるのである。

我らは、また印度流儀に汎神論の弊に墮するものでない。印度に於ては山川草木の悉くに獨立個に平等の神性を認める。日本神觀にありては、天地を一生命体と見る。此處が汎神論と日本神觀との立場の相違である。

萬物に神靈を認める點に於ては、汎神論と同一であるが、彼は各々の物に獨立に個々別々の神を認める。夫れに對し、われは一如の立場に於て見る。是が日本神觀本然の立場である。

故に、日本神觀は、唯一神觀に立つ汎神觀である。即ち汎神論的立場に立つ唯一神觀である。

世界二大宗教たる佛教と基督教は各々その神觀に於いて二つの兩極を占めてゐる。わが日本はその兩極をつなぐ一線の中心點に其の神觀を確立し、其の何れにも偏せず、中正を保ち、然も兩者を抱擁して立つのである。

我らは唯一神及び汎神の對立相克に生きない。兩者を超越し、而も兩者を抱擁する、唯一神觀即汎神觀、汎神觀即唯一神觀の眞髓に生きてゐるのが我等である。一寸考へると、同じ水準線から見れば、是れは矛盾であるかに見ゆるが、實際は決してそうでない。生命界は、いつでもみなこの二重性に顯現するのが本質的實相である。

天地を構成する物質に就て見るも、原子内部を構造する電子の本質は一面から見れば「粒」であり、他面から見れば波である。粒にして波、波にして粒。是が宇宙本体の實相である。

「粒」と見る時は唯一に見えるが、「波」と見るときは遍在に見える。

之を宗教的表現に移せば、唯一にして汎神、汎神にして唯一、この二重性を具有しつゝ、太古からその眞理性を堅持して來たのが、即ち日本神ながらの神觀である。

淺い智慧から見れば、これは矛盾にも見える。故に、何れの時代にも之を合理的に一元化したかつたのは人間の至情である。けれども、天佑なるかな、我らの先祖は之を人智に於いて改

めず幾千年を神代時代そのままに傳承して來たのであつた。

いづくんぞ知らん。人の矛盾は、神の合理であつたのである。最近科學の達した學術的最高峰は、遂に日本神觀の勝利を宣告するに至つたのである。

皇國に神自らの大生命が降臨し、具象しておればこそ、斯る奇蹟が成立するのである。神自らの顯現たる國家にあらずして、どうして斯る透徹せる神觀を堅持する事が出来るであらうか。「大日本は神國なり」との事實を立派に立證し得るものは、日本神觀の眞理性自体にある。

重ねて言ふ。我らの皇國信仰は、基督教と佛教の既成宗教から、明白にその立場を峻別しておかねばならぬ。

我らは叫ぶ。「我ら皇國民は天地おのづからの唯一神を萬象を通して拜し且つ之を信す」と。復古神道の先馳者たりし加茂真淵は言ふ。日本の神は「天地おのづからの神」であると。またその後の一神道家は言ふた。「天地は活物、その心は誠、その誠は天照大神」と。

また、聖書は唯一神を主張するが同時に遍在の神を力説する。詩篇一三九篇に「我いつこに行きて汝の聖靈を離れんや。われいつこに往きて汝のみ前を通れんや。われ天に昇るとも汝かしこに在し、われわが榻を陰府にまうくとも、視よ汝彼處に在す。我あけぼの翼をかけて海

のはてにすむとも、彼處にて尙汝の手われを導き汝の右の手われを保ち給はん」と。彼らはこゝに遍在の神をあざやかに仰いでゐる。また世界に基督教を傳へた聖パウロも同じく「神はわれらを離れ給ふこと遠からず、われらは神の中に生き、動き、在るなり。」とて唯一神を崇める彼も、此處に遍在の神を拜してゐる。またイエスも野の百合、空の鳥、一粒の種子の中にも神の光を拜しておられる。イエスが大自然を通して神を教へられたのは餘りに明白な事實である。乃ち知る。まことに天地の神靈を靈覺した者は、何れも彼らの神觀を唯一とか汎神とかの一方に局限せず、一切萬象を貫いて唯一の神を拜してゐるのが彼ら聖者神人であつた。是れ亦日本神觀に絶對の眞理性が存するとの一事を立證する有力なる論證である。

私は言ふ。「日本神觀は佛教も基督教をも排斥しない。却て兩者を包擁し彼らを生かし、彼らを完成するのである」と。

今迄は「天つ神」への信仰が何となしに、歐米や印度に比して低級であるかの如き劣等觀を國民に持たせる弊があつた。我らは強く主張する。日本神觀こそ基督教と佛教乃至は一切の諸宗教を指導すべき最高の神觀に堅立してゐるのであると。

皇國信仰四大要素

第一、神教信仰

我等は、歴史的事實である神教の背後に躍動する天地の神の意志發動を信する。之れ神教信仰である。

天地造化の絶對神の神意先づ決し、然る後に神の意志が地上に顯現する。人語るに非ず、天地の神自らが人の口を通じて語り出でられたもの、夫れが神教であると我等は信する。

信仰に立たない神教觀は、ただ普通の歴史的事實として、一個の人物が己が意志を表現したものと見る。その意志を代々の天皇が、畏み謹んで繼承したもの、之が神教であると見る。

その見方は、一種の語事であり、單なる信念の領域に止まる。故に之には、天壤と共に無窮であるとの絶對的權威の保証がない。ただ一つの太古の物語であり、祖先の語事である。

之に對して、我等は皇國日本の成因を天地絶對神の意志發動によると信する故に、神教を時空を超越する絶對神の意志の發現と見る。我等は、かく信じて我らの心は地にありながら天に

つながれるに至る。

人は問ふであらう。何故に史的人物の語つた言葉を、神より出でしものとして信するのであるか。その信する根拠を明確にせよと。尤もな事である。

(一) 信仰の根拠

我らは断じて之を根拠なくして迷信的に信するのではない。科學を攻究する時と同様の態度に於いて、然く信すべき理由が確立するから、我らは斯く信するのである。

その理由とは、私一個人の立場から言へば、私は科學の研究と宗教的体験の兩者にありて、如何なるものが人間の思慮より出で、如何なるものが天地の普遍的眞理であるのか。また如何なるものが、神より出でし言であるのかと長年に亘り体験と思索を積み重ねて來た。

科學者は、一つの簡単な事實を通じても、天地の眞理を看破する。また單純な人の頭腦から出でた數理的假定をも、天地宇宙の大眞理なりとして實証すべき論理の中に生活してゐる。

この筆法に於いて日本古典の史實に、科學的物指を以て徴める時に、古典に於ける神敕なるものが、人より出でし一時的のものであるのか、或は天地宇宙永遠生命の絕對者が人の口を通じ

て語り出でてゐるものであるのか、二者何れなるかは、古典を深く研究すればおのづからその眞偽の反應は確實に鮮明に判別されてくる。

他の一つは宗教的聖典のうちでも、特に聖書の研究である。これは日本古典と同様に神の選民イスラエルの歴史的記録である。宗教的に無關心の者から見れば創世記十二章のアブラハムへ降下せる神約は何でもない事實に見える。けれども、之がイスラエル民族に對する神の契約として三千年の歴史を貫いて今日迄もこの神の約束が保証されて來た。また此の言が單に主觀的に思ふたと云ふのでなく、過去に於ける彼らの史實によつて絕對神がアブラハムに宣り給うたのであると結論づけるより外に道のないほどの確實さを、その後の歴史が示してゐる。

また新約に於けるイエスの一言にしてもそうである。不信のユダヤ人から見れば、並々の人の言とイエスの言と何らの差別はない。けれども、それが眞實天父が彼にありて宣り給うてゐられたのである事が論證される。『天地は過ぎ行かん、されど我が言は永遠にすぎ行く事なし』とのイエスの一言は眞實そのものであるとは、過去二千年の基督信者各自の保證する處である。また貧弱な私の過去四十年の信仰体験でさへ亦之を「然り」と立證する。

イエスは宣ふた。『善き樹は善き果を結び、惡き樹は惡き果を結ぶ。その結ぶ果の善惡により

て樹の善悪を知るべし」(マタイ傳七の一七)と。この一言は私たち科學を專攻するものが、その研究室に於て採る態度をそのまま金的に射る如く洞破したものである。

科學に於ける最初の假定は、之が眞なりと數多の實驗によつて實證されて後に、假定は原理として成立する。更に我らは之を未知の問題に當て嵌めて新創造を生み出して行くのである。聖書の聖言も同様である。之を日常の人生問題の諸相に當て嵌めて行くとき、その聖言は恰も科學原理を應用するかの如くに、一々に當て嵌まり、難解の問題を美事に解いて行く。理性に鋭い歐米人の全部が、聖書の聖言を「神の言」として崇拜し、イエスの聖言に神の權威を拜してゐるのは、亦以て上述の理由によるのである。

(二) 神の權威發現

以上、神の權威の一表現として見られる科學と基督教の二つにこもる眞理の見方に充分なる訓練を積み、眞理發見の方法とその呼吸を呑み込んだ後に、日本古典とその實證たるべき日本歴史を通覽するに、日本歴史を生み出す根本的原動力となりし神敎の中に私は神の絕對權威を拜せずにはおられないものである。

私は自ら思ふ。私が多年科學の研究に没頭して、或る程度の研究工夫の修鍊を體驗し得た事が私には大きな恵であつた。また今一つには、一基督者として三十數年間聖書の研究とその聖言の體驗を積み得てゐること、この二つが私をして日本古典中の神敎を神的事實として敬虔なる思を以て仰がしめる理由であり、御神敎に天地創造神の絕對權威を信仰せしめる理由である。科學的事實の奥に科學的原理がある。それと同様に信仰的事實の奥に信仰的原理がある。この兩者は一つの眞理の顯現であるが、目と耳の如くに異なる對象に對し、別個の原理が成立してゐる。目が認識する光の奥の光學原理と、耳が認識する音響の奥の音響學の原理とは夫々對象も違ひ、原理も違ふが、光と音とは何れも大自然界の嚴然たる事實である。縦波の光波について眞理の見出し方がわかれば、横波の音響の波の消息についても何が眞理で何が誤謬であるかを判定する道の發見はさほど困難のものではない。科學と宗教の關係にも、是れと似た呼吸がある。

茲に一つの挿話を私は語る。或る夏私は九十九里濱へ海水浴に行つた事がある。早朝一老漁夫が熱心に海面を見つめてゐた。やがて力強く叫んだ。「あゝ、あそこにおびたゞしい鱒の群が來た。それ！」と云つてゐる。まるで見えるかの様な態度である。私も同じくその方向に目を

向けて見つめたが、残念ながら私の目には何一物それらしいものが見えない。それで、若しその指した人が不真面目な態度の人であるならば、「それは冗談だらう」と疑ふ處であつたが、彼の老漁夫の指さしてゐる眞剣な態度に私は打たれて了ひ、私にはわからなかつたが、老漁夫の言を信じて、「あゝそうですか、おちさん、どうしてわかるのですか」と素直に彼に聞いた。然々の具合の時はこれくゞだと老漁夫の永年の体験をきかせられ、私は大いに學ぶ處があつた。この時にも、私は心の中で信仰と云ふのは、この呼吸だなと悟つた事であつた。

老漁夫だとして海岸から實際に魚の實體が見えるわけではないが、多年沖に漕ぎ出して鰯を漁つた腕におぼへのある彼には、水面の動きを見て、すぐに風に揺ぐ水面の動きと、鰯の群による動きとを一見區別して、鰯群の客觀的實在を直覺したのである。これと脈々相通うものを日本古典の神敕信仰に私は把握するのである。私はあの時、老漁夫の言を信じた。老漁夫が水面を見て、鰯群の存在を見たように心に受けたこの態度を天の靈界に向ければ「信仰」となると思ふ。また未熟な私が何一物知らないで、老漁夫の言を信じた。これも信仰のよき一つの例示であらうと思ふ。私が青年當時にイエスの言を信じた態度は老漁夫の言を信じた心にあたるのであらうと思ふが、近年私が日本の神敕に對する信仰は、老漁夫が水面の動きに鰯群を見た

態度に似てゐるのかも知れない。私はなほこれから、この一事を萬人に立證し得る道の攻究を進めるであらう。世の多くの人には水面の動きだけでは承知が出来ない。實際に鰯の群を船の上から見なければ信じない。「鰯を我に見せよ。さらば我れ信すべし」と叫びたくなる。これは信するのでなくして、知るのである。見たものは知つたので、最早それで信じなくともよいのである。「信」と「知」の限界をよく知るべきである。少なくとも私自身は、自分の全靈全魂をあげて神敕の「神」より出でし事を信する。日本歴史と云ふ大海の水面の動きに群魚を私は見るのである。之が私の神敕信仰である。

神をかく天地宇宙の神の意志發動として信受するにあらざれば、日本歴史の背後に躍動する神國日本の生命的根源には觸れ難いものがあると私は信するのである。

(三) 國体の礎石

皇國信仰は、神敕信仰を以つて第一とする。皇國に降りし天壤無窮の神敕を、天地造化の神意發現として信受する。こゝに國体の礎石がある。

皇國が未だ地に成らざりし先に、まづ天の側に皇國日本に係はる聖意が成り、その永遠に至

る神の經綸具現の端緒として神教が宣り出でられた事と我らは信ずる。而して人が神に和する限り、この神教は必ず神にありて完遂せらるゝ事を確信する事が神教信仰である。

由來、信仰界に於ては、「神光あれ」と云へば「光成り」、「天地成れ」と神宣へば、「天地は成つた。」可見世界の出現に先き立ち、既に靈界にその實が成つてゐると心に受ける事が眞の信仰態度である。この信仰態度を以て神教を仰ぐのが皇國信仰の第一である。

第二、天皇信仰

第一に、天つ神の言を絶対神の言であると信じ、第二に御神教が絶対神より出でし「みことのみこと」であると信ずる信仰が確立してくると、その基本的な物事の見方、信じ方によつてその後日本歴史に顯現する諸相に對する我らの態度はおのづから定まつてくる。而して皇國信仰に於ける最大の重心點は、天皇信仰にある。

天皇信仰とは天皇を現神と拜しまつり、天皇の中に宇宙の神を拜し奉る信仰である。

天皇と申し上げる言葉の内容は天照大神そのまゝの皇統連綿たる萬世一系の神靈を意味し奉る。故に、今上陛下と申し上げるのは、上は神に通じ、今上陛下は今神陛下の意にて、無限絶

對の神の御靈を目のあたり御肉体に於いて拜し上げ奉る今在し給ふ神との意である。

天皇の御本質は天照大神の御神靈に在し、天照大神の御本質は産靈神に在し、産靈神の御本質は天之御中主神に在し、天之御中主神は即ち造化絶対神と信仰しまつる。即ち宇宙絶対神を天皇の御中に拜し上げ奉る信仰が天皇信仰である。

我らは畏れながら、天皇の中に無限に漲る天地の神の神靈を仰ぎ奉る。天皇は宇宙神の地上に於ける現人神で在し給ふと我らは信仰しまつる。不可見の天地の神が、見ゆる神として玉座にいまし給ふのが天皇であらせられる。神が歴史の中に現はれ給ふとの信仰に立ちて日本國民は、天皇の御内に絶対神を拜し奉る。之が天皇信仰である。之が皇國信仰の第二である。

第三、六合開都信仰

神武天皇の詔敕にある「六合を兼ねて以て宮處を開く」の一言に皇國存在の意義が最も明確に具現されてゐると我らは信ずる。皇國の存在使命は此の一言にあると信仰する。之が六合開都信仰である。六合開都は八紘爲宇と表裏一体をなすものである。六合開都が成就されて後、始めて八紘爲宇が實現される。

六合開都とは、天地六合を悉く神の宮處たらしめることである。即ち宮處とは神の住み給ふ場處である。萬邦萬民をして悉く神に仕へる民となさしめる事である。かくなりて始めて全人類各々その所を得るのである。

己が腹を神とする自己中心の人間的生活が現代人類の實相である。かゝる誤てる人間生活を革新して、萬邦萬民共に神に仕へ奉る宮處（みやこ）にせしめる。此の悠遠なる大使命を完遂せしめる事が皇國の存在する理由である。

我が皇國は天地六合をして神に仕へしめ、神の宮處とせしめる爲めに天より地に出現せし國なる事を我らは信仰する。その爲めの一億一心である。その爲めにこそ、全國民は全生涯を獻げて最善を盡すのである。之が「六合開都」信仰である。換言せば、「皇國の存在は、全世界神國化の爲めである」との信仰に立つのが我らである。この一大目的貫徹の爲めに我らは生き働き且つ死する者である。これが我らの云ふ皇國信仰の第三要素である。

第四、天佑信仰

天佑信仰とは皇國が神國だから何事を爲してもよい、必ず天佑神助が件ふと言ふのではない。

神國なればこそ、皇國は神意の外に爲してならぬ國である。若し、神意ならざる不徳不義を犯すならば忽ち天罰の下る國である。神を恐れ、畏み、ただこれ神意のみを敢行する國である。而して、神の聖意具現の爲めであるならば萬難を排して全力を盡して神意に奉行しまつる。この時、神の力は地に和し、神の佑は皇國に降る。詮ん方つくる時にも、天佑神助のもとに必ず道は開ける。萬邦萬民に係はる神の聖約は皇國を通じて必ず地に完ふされるに違ひない。必ず成されるとの確信に立つて神慮を決行し行く信仰が皇國の天佑信仰である。

かくして我らは神と偕に無限の希望に生きる。せん方つくれども希望を失はず、倒るれども亡びず、七轉八起、神力により勝ち得て餘りある不思議なる能力に生くる民である。泉の如く滾々と神力がおのが衷にあふれ来るを体験すべき民である。これが天佑神助信仰である。

一億の民が一心となつて熱火の如くに此の皇國信仰に生きぬく時、鐵石もよく熔かし得るであらう。

以上の皇國信仰が、皇國日本とその國民の生命である。

兵戦は一時であり靈戦は永遠である。今や全人類は惡魔の足下に躪踏され、鐵火の下に焦熱地獄の慘を出現してゐる。世界人類を此の惡魔の手より奪ひ返して、神の所有に献げ返す一事

こそ、皇國に使命づけられた皇國本然の戦である。兵火の戦は、この眞實の戦の一部に過ぎない事を知らねばならぬ。

我らは、この永久に續く聖戦の爲めに、武器を供へるのである。これが爲めの國民練成である。此の練成に眞の力を與へるものこそ皇國福音信仰である事を私は確言する。

國體の本義と皇國信仰

緒言

國體の本義が公刊されてから既に滿四年半になる。今回その姉妹篇として「臣民道」が文部省から出版になつた。何れも近來の好著である。

この二名著を讀んで私自らが見出すことは、同じ事實を仰ぎつゝ文部省と私共の間に、その角度と視野が根本的に相違する事である。

文部省は國民道德の規範から國體を考察し、私共は國體を信仰の立場から仰ぎ視る。こゝに兩者の間に明確なる立場の相違を見るのである。

若しも前者がより完全、より高次であるならば私共はたゞ之に隨喜隨順すれば足りる。が然し、若しも前者の欠けたる處を補ふべき何物かが後者にあると信じ得るならば、進んでその所信を披瀝して翼賛の任に立つのが至當であると思ふ。凡そ一國、一民族の精神生活に於いて道德と信仰が如何なる影響を與へるかについては既に過去二千年の世界の歴史が明瞭に之を實證してゐる。今更改めて論議すべき餘地を残さない。何としても全國民に燃ゆる如き眞實の信

仰を生かさねば、一國一民族は眞の生命の道に躍進し得るものでない。

問題は極めて簡單にして明瞭である。即ち道德と宗教の立場の關係に歸着する。何れが生命の源泉に觸れるかとの一點に歸する。由來我が國體の本質に鑑みても我皇國は神との關係に於いて成立してゐる宗教國である。即ち信仰にありて仰ぐべき國體である。この一事は史的事實に見ても極めて明白であり、一點の餘地も残さない。かくも理論の立場と史實の立場からも國體の本義を宗教的信仰の上から仰ぎ觀なければならぬ國柄であるに拘らず、何故に信仰の立場を避けて國民道德の規範から國體の本義を見やうとするのであらうか。私はこゝに當局の大いなる苦衷の存する事を知る故に、敢て之を批判しない。謙りくだつて、その欠陥を補ひ、補翼の任務につきたいと念願するのである。

X X X

國體の本義を明かにすることは、獨り我が國體の爲のみではない。今や個人主義の打開に苦しむ世界人類の爲めである。

本來、日本の存在は世界の爲めであつて、倭小な日本の爲めでなかつた。故に皇國の進む方向は決して日本と云ふ一小島國が逐次發展を遂げて終に世界的強國となるのではなかつた。最

初から世界を修理固成する爲めの一存在として、天から地に遣はされた國であつた。恰もイエスが全世界人類の爲めに地上に遣はされた神人であつた如く、またニュートンの前に落ちた林檎が宇宙萬有引力の一顯現としての一林檎であつたやうに、皇國日本は神の經綸成就の爲めに神から地に遣はされた國であつたのである。

輝く生命を裡に藏し、萬民と萬邦が歸一すべき不思議な宇宙的國家が皇國であつたのである。六合開都、八紘爲宇なる言の眞義がこゝにある。私は重ねて言ふ。皇國日本は神の宇宙經綸成就の爲めの天的國家であつた。皇國には宇宙萬有の實體が盛られ、萬有が包まれ、萬有が動き、萬有が統一される生命的原理が活きて形を成してゐる國であつた。今更ことあたらしく、これから出發して世界統治の道を案出して世界に臨む國ではなかつたのである。

(一) 國體の三要素

「大日本帝國は、萬世一系の天皇、皇祖の神敎を奉じて永遠にこれを統治し給ふ」と「國體の本義」はその肇國篇に於いて萬古不易の國體の本質を宣明してゐる。

即ち國體の主要素は次の三つから成立する事を知る。

一、萬世一系の天皇

二、皇祖の神敕

三、永遠統治

而して、國體の本義が道德規範であるか、又は信仰の領域にあるかは、天皇の御本質と皇祖の神敕を如何なる立場にありて拜するのが眞理であるのか。是にて問題は極めて分明に決せられると思ふ。

天皇を現神として拜する事は、神を除外しては不可能である。また神敕は神の敕であつて人の敕でない事も自明の事である。故に國體の内容は、そのまゝ神との關係で即ち宗教的信仰の關係である。故に、國體を仰ぐ道は神に對しまつる信仰態度でなければならぬ。即ち知る。國體の本義は人本主義の信念ではなく、神中心の信仰的態度である事を。

ただに第一、第二のみでない。第三の永遠統治も亦同様に信仰の領域にある事を告げる。元來、人の所作は必ず破れる。神より出しもの以外に永遠たり得るものは、天上天下に一つとしてあり得ない。「若しその企圖、その所作、人より出でたらんには自ら壞れん。もし神より出でたらんには彼らを壞る能はず、恐らく汝ら神に敵するものとならん」(使徒行傳五の三八)と敎

法學者ガマリエルの一言が聖書の使徒行傳に傳へられてゐるが、千古を貫く至言であると私は思ふ。重ねて云ふ。人より出づるものは永遠たり得ない。神より出づる惟神のものばかりが、永遠に至るのである。

故に知る。「永遠統治」と云ふ事があるとするならば、その一事が既に神より成りし内容を表明するものである。

乃ち右三要素とも、「神」を無視しては、その意味を失ふ事實なる事が明白になつたと思ふ。ただ残る問題は、「神」と云ふ言葉の内容である。是も亦日本古典に一貫する日本神觀の本質を知る時、夫れが何を意味するかはおのすから明白である。人類が嘗て仰ぎ得る最高の神觀こそ、我日本神觀であることは最早や寸分の疑を差し挿み得ざる事であると私は信じてゐる。

(二) 國體の三精華

次に「國體の本義」の一書は國體の精華として次の三事項をあげてゐる。

(一) 大義に基く一大家族

(二) 億兆一心、聖旨奉體

③ 忠孝の美德發揮

以上の精華の花たる三大事實を咲かしめる國家の根源的生命は何であるか。これこそ國体の淵源である。この淵源そのものが、惟神であり、神國の實體でなければならぬ。

こゝに達して、いよく問題は最深の核心に觸れてくる。然らば、惟神の「神」とは何を云ふのであるか。神國とは何を内容とするのであるか。こゝに始めて我らは日本神觀の本質論に入り得るのである。

由之觀之、日本國体の根本的本質は、何としても、「大日本は神國なり」との一言につきる。また神國を神國たらしめてゐる「神」の本質問題に問題は歸着するのである。

私は世界諸宗教の神觀中、日本神觀こそ最高位を占むる最高度のものであると確信するものである。以下順次この最高峰を目ざして所論を展開して行くであらう。

(三) 神意の發動

靈界と現象界の關係を最も巧みに表明してゐる一例は、聖書の次の一句であると私は思ふてゐる。

「善き樹は善き實を結び、惡しき樹は惡しき實を結ぶ。凡その結ぶ果の善惡によりて樹の善惡を知るべし。」(山上垂訓マタイ、七の十七)

或る一つの現象が、眞に神より出でしものならば、必ずその原因に對應する結果が存在する筈である。もしその結果なき場合は、その前提は眞なりとは決定し難い。若しも日本が眞に神よりなりし神國である事に誤認がないならば、豈國より今日に至る史實に於いて神國であるとの保證が伴ふべき筈である。

神意の發動が主因であり、國体はその結果である。國体が永遠不磨の大本に立つたならば、それを實證すべき事實が、二六〇〇年の國史を貫いて炳として輝いてゐなければならぬ。而して我らはこの事實を正しく、日本歴史の中に發見する。之れ皇國が地より出でず、天的のものであり、人より出でず、神より出でし事の保證である。過去二千六百年、日本國家はいよく、天壤と共に窮りなく進展する國体歴史の事實は、即ち我が皇國に神格が宿り、神的生命がその中に伸展しつゝある何よりの證據である。

(四) 重大なる分歧點

國體の本義、肇國篇の初頭に於いて、同書が立つ立場を明らかに宣明してゐる。即ち

第一、肇國の事實を、國體本義は、「皇祖天照大神が神敕を皇孫瓊瓊杵尊に授け給ふて、豊葦原の瑞穂の國に降臨せしめ給ふた時に肇國は存する」と斷言してゐる。而して古典卷頭にある、天地開闢、修理固成の記事を批評して

「かゝる語事、傳承は古來の國家的信念であつて、我が國は、かゝる悠久なるところに源を發してゐる」(國體本義第一〇頁)と同著はその立場を鮮明に表白してゐる。

日本古典の修理固成の記事が、果して同書の言ふ如く語事であり、傳承であるのか、或はまた靈界にかゝる事實があつて、その結果として日本歴史の史實が生れたのであるか。死活を制すべき重大性がこゝに宿つてゐる。この出發點の一步の差は遂に千里の差を生むに至るであらう。若しも國體の本義が前者の如き人本主義にあらずして、神本主義に立つべきが眞理であるとすれば、「國體の本義」の著書は、今一度皇國信仰の立場から稿を改めるべきであると私は信ずる。

今後、全國民を皇國信仰に在りて生活せしめるのか、或は單なる道德規範内に生活せしむるのか、この一事は將來皇國の死活を制する重大條件である故に、慎重の態度を以て検討と鍊成

を要する。

(五) 眞理は何れか

國民全般に承認せしめる方策から言へば、萬人共に己が理性にてなるほど是は合理だと首肯の出来る範圍内に於て史實を取扱へば最も無難である。故に多くの場合には、此の道を選んで史實を合理的に選別しやうとする。

處が、信仰の原理から言へば、信仰の立場は、靈覺をもて極めて合理的に眞理性を把握するものである。故に、靈覺の未訓練の人々にとつては、信仰は理解し難く、それよりも低次の理性の範圍内の方が一般大衆をより多く承服せしめ得る。

この相違より甲にとつては血湧き肉躍る天的生命も、乙には夫れが符に落ち兼ねる事實に聞える。合理主義の人々にとつては、國體だからとの理由で之を信仰せしめんとすれば強壓されるやうにさへ感じるであらう。信仰を強ゆる如き外觀を呈しては、憲法の信仰自由の條項に抵触するかに見える心配が起る。

故に、憲法問題と民心不理解的の點より見て、現在の國民の大部分が直ちに共鳴理解し得る程

度の人本主義と合理主義の立場で一先づ一歩先きへ國民の心を善導しやうと考へるのが爲政者から見て賢明な道であるに相違ない。この態度に立つと、どうしても合理主義的な信念の立場から、「國体」を觀る事が先づ無難である。かくして上記の如く當局の立場に落ちつくのが一應無理からぬ事であると思ふ。現代指導者達の中には、いまだに「神社は宗教にあらず」などと考へてゐる人々もある位の時代である。唯物主義と人本主義萬能の時代に學問を打ち込まれた者の大部分は、信仰の境地は自己の体験外の事だとして對岸の火事視する人々が多い。稍目覺めた人々の中には、國体を信仰にありて論ずる事が眞理だと悟り得る人々も決して少くないと思ふが、進んで黎明を呼びさます決意に充つるほどの確信の域にまだ到達してゐないかに見ゆる。かゝる状態にあつて、多數の委員により合議されつゝ編纂される著述は、いつでも高峰と谷とが打ちならされて、最大公約數の水準線で物を言ふ事になるのが世の常である。谷間に佇む人々には、よく筋道の立つた道理の話だと受けとられるが。靈魂の盈滿を求むる者には、これでは空粗な概念にしか響かない。卒直に云へば、靈魂の最高峰から見返さねば、わかり兼ねる尊嚴な我が國体を最大公約數の線にまで引き下げる事は、果して眞理に忠なる行爲であらうか、否や、大に再検討を要する點が此處にあると私は思ふてゐる。

(六) 信念の立場を採りし理由

今一つ、此處に反省しておくべき事項がある。それは、我が國体が人爲國家であり、人間の理性の範圍内で悉くが論理づけられ、合理化し得る國柄であつたとするならば、一切を合理的に考察し、人間本位の立場に引きおろし、近代的な新解釋を以て論理的裏付けをして一向に差支へはない。却つてその事が國体を近代科學的に學術化する事にもなり、誠に慶賀すべき事にもなる。古來、日本國体を哲學的に見なほし、哲學思索の對象として日本國体を取扱つたものが少なくないのも、この立場を採つた爲であらう。之は一つの大切な勞作であつたには違ひないが、畑の全面にうねを作る事と生命の種子を刈りとる事とはおのづからそこに相違がある。哲學的勞作と信仰による生命の把握とは此處に質的相違が生するのである。日本國体は、惟神のものである。皇國自らが神國であるのだから、合理主義や哲學だけの原理では三次の問題を二次の公理で解かふとするものだ。三次元の水量の測定には一次元の尺度でも駄目であり、二次元の面積の原理でも駄目、三次元の柵を以て量らねば眞相は計量されない。

我が國体が、神ながらの國であり、神教的要素を多分に包含する事實を今日迄世人は認めて

來た。神界の實相に即して國体の生命を把握すべき事を承知しながら、從來の神道に附隨する、ともすれば迷信に墮落し易き神がかり状態を嫌忌するのあまり、低次元の尺度だとは知りつゝ止むなく一段下げた合理的な「信念」の立場で國体の實相を表現すると云ふ苦しい状態におかれてゐたのではないかと私は考察してゐる。

(七) 科學する心

是に對して私は敢て言ふ。

高次元の靈界の實相は、高次元の表現を以て學的に取扱はねばならぬ。之を科學する心で、高次元の世界に立ちて靈界の實相を観察し、之を學術化せしめて行くを要する。此處に私は當然「日本信仰學」なるものが生れて來る事を信じてゐる。

光は目を以て、音響は耳を以て、香氣は鼻を以て、靈界は「靈」を以て觀測すべきである。かくして正しく觀測した結果を、「學的」に綜合組織化すれば、そこに「靈學」が丁度過去に光學や電磁氣學が成立した如くに成立してくる。

右の態度に立つ結果として、いま迄神がかり状態の外に表現の道を知らず、不合理に見ゆる

ものをそのまゝ止むなく信ぜさせられてゐた高次元の國体内容を高次元のまゝ、その靈界の原理に於いて合理的に科學する心で把握し得るに至る。

私の言ふ「信仰」と云ふのは上述の基礎に立つものである。強いて理性を盲目にし、不合理をそのまゝ眞實だと受けとらせるが如き非合理的な信仰では斷じてない。

信仰は斷じて非合理や不合理であつてはならぬ。私たちの云ふ信仰の内容は超論理であるが、而も合理の事實を科學する心にて、そのまゝ然りと受け入れる事である。

(八) 國体に對する新しい見方

國体と云ふ國家的生命を高次元の靈界の一顯現として觀察する時、それを從來の如く低次元の信念の境地に引き下げないで、高次元のまゝ、高次元に通ずる別の原理にて靈界の事象を、靈眼、靈覺を以て仰ぎ見ればよい。

そして、その眞理性を確立せしめ、その靈界眞理に立ちて、我が皇國の中に、神の永遠生命を進展せしめる實踐の道を、我らは皇國信仰道と言つてゐるのである。

「神は靈なれば、拜する者も靈とまことを以て拜すべし」と聖書は言ふ。この一事は實に千古

不磨の大真理である。靈なる神を拜するには、人の裡に躍動する靈を以てしなければならぬ。單なる腦裏の働きによる理性だけでは觸れ得ない。

端的に云へば、信仰とは靈が直接に宇宙靈に觸れる道である。その結果を無批判に表現すると所謂迷信めいた神がかり状態になる。けれども、我らは是れを科學する心で検討し、嚴正なる科學態度で体験内容を整然たる科學組織の下に合理化する。之が私たち科學の世界に多年没頭し、その世界の中に生きぬいた者が仰いでゐる「信仰する心」の内容である。私たちの主唱する皇國信仰と云ふのは、そうした反省と批判の下に構成されたものである。

X

X

X

なほ一言、私たちの言ふ信仰内容を更に科學界の引例にて類推さるゝものを語れば、丁度ニュートン物理学の原理とマックスヴェルの電磁波の原理との關係に相應するものではないかと私は思ふてゐる。

即ち天体の運行にはニュートンの法則がそのまま當嵌り、その物理學的言葉でよく萬人に普遍妥當に理解せしめる。けれども、このニュートンの原理は電磁波の世界にはそのままでは當て嵌らない。無理に之を應用せんとすると、丁度神がかり状態が生れてくる。この時に電磁波

の世界には全々別個の原理が成立してゐるのだから、その別個の原理に則して科學する心にて追求して行けば、不可解に見えた電磁波の世界は極めて合理的に解き明しがついて行く。

合理主義と哲學的思索の立場は上記のニュートン物理学にあたり、靈界の一顯現たる我が國體は電磁波の現象にあたるのであらうと私は考へてゐる。この電磁波に則した別個の原理が、私たちが用ふる「信仰」と云ふ言葉の内容である。かゝる立場で皇國の國體を仰ぎ見たる内容を私は是を見て「皇國信仰」と云つてゐるのである。

(九) 國體の本質

國體の根本は、天皇と民との關係を道德的規範の下に定めるに止めてはならぬ。進んで天皇は即ち國家であらせられる。而して日本國家は他の異國の如く人爲國にあらずして、神國である。神國とは皇祖皇宗の神裔たる天皇が統治し給ふから神國と云ふに止まらない。神國とは、天地宇宙の神靈が具象して國の形に成つた國なるが故に神國と云ふのである。我らはこの神國信仰に徹するを要する。

國體の實体たる國家生命の由來が、神敎に基くとは誰人も承認する處であらうが、日本古典

巻頭の記録を、「國體の本義」の著書の如くに古來の語事、傳承として單に國家的信念として見るのが至當であるのか、或は信仰にありて、天地、宇宙、神の意志、發現と見るのが眞理であるのか。この一點に日本國體論の死活が制約されてゐるとの私の意見は既に述べた。我が國家の內容が單なる地上の史實のみであるとするのか、或は天的な靈界との密接不離の神格國家であるとするのであるのか。二者何れとなすか。こゝで皇國の死活問題が決められる事を再言しておく。

この重大問題を更に具體問題について言ふならば、神敕の中に天地の神の權威を見出し得るか否か。この一つで決められると思ふ。信仰はもとゞ神の權威有無の問題に歸着するのである。

一見、荒唐無稽に見ゆる古典巻頭の記録、又は天照大神の神敕が、過去三千年の史實に見、また靈界眞理の立場より再検討を加ふる時、御神敕に神の權威を見出し、古典巻頭の言の中に無限の眞理性を私は見出さざるを得ないものである。私は天地に活ける神の權威を日本皇國の史實の中に鮮やかに拜する。

此處に、國體の根本義を信仰を以て考察しなければ、眞實でないところの確信が私に湧いて來

る。この信仰的見地に立たなければ、未だ國體の堂奥に徹透し得ないとの意見を私が堅持するのは、こゝに理由があるのである。

然らば、如何にして國體の事實を見て、天地神靈の權威に觸れ得るのであるか。この重大問題に對しては、私の靈魂の中に於いては明確に割り切れてゐる問題である。

少なくとも左の六つの點から幾何學で譬へるならば、先づ圓周上の各點に切線を引き、それに垂直線を立て、各線の交叉する圓の中心點を求めて見れば、その結果は萬人に皇國の神性を立證することが出来るであらう。

第一、皇國の史實の背後を貫く靈界眞理

第二、皇國の生命的内部機構（忠孝）

第三、日本神觀の崇高性と科學性

第四、過去三千年の日本歴史の史實

第五、世界歴史の歸結する事實

第六、聖書的保證

(十) 神格國家

他の宗教の眞理性を深く學び、神界の原理に覺めて見ると、その立場より日本國體を見れば見るほど、掌を指す如く、國體が神より出でし事實を知る。かくして、日本皇國そのものが、天來の神の聲である事を私は信ずるものである。

私たちが他の世界的宗教による信仰について鍊成を重ね、また科學の研究に工夫を積み、現象界を通じて原理界を見透す鍛鍊が成つてくると、それらを望遠鏡として靈界を觀測する時、皇國日本の歴史的存在の奥に豁然として、宇宙神靈の巨大なる足音を聞く。神の權威に觸れて襟を正しくせざるを得ない。實に、耳ある者は聽くべく、目ある者は見るべし。

私は自分の全靈全魂をあげて確信する。皇國の背後に宇宙神靈の聖手が直接に動いてゐる。皇國日本の存在は天地の神、惜に在さねば能はざる事象である。即ち皇國の國體は「信仰」にありて仰ぎ見るにあらざれば、その眞相には觸れ得ない事を確信し得る。私が皇國信仰を主張する所以は此處にある。

國體信仰、または皇國信仰は、實に今まで全世界に封ぜられてゐた特殊信仰である。皇國にのみ存する獨一にして世界無二の特有信仰である。

二大世界宗教の佛教と基督教は、個人の立場より神を信ずる信仰であるが、皇國信仰は實に皇國日本を一神格とし、皇國が神の一生命体として、天地の神の聖前に生くる國家の生活道である。こゝに皇國獨一の特徴がある。一個人を永遠の生命に入れる道が個人救濟道の基督教、佛教であるが、皇國信仰は皇國日本が一人格として、永遠生命に入る道である。

かく國家が一人格として立つ信仰道と云ふのは、皇國獨一のものであり、正しく世界に絶する獨一無二のものである。

皇國信仰の内部構成の要素としては、凡ゆる個人救濟の宗教を悉く包含してゐる。換言すれば古來の個人宗教の各宗各派は悉く皇國信仰の傘下に統合すべきものであつた。皇國信仰にありて萬教は歸一される。

曾て私も萬教は共通の一理念のもとに統一さるゝかに考へた事もあつたが、理念には何の權

威も力も伴ひ得ない。
 神の大生命そのものの具現たる皇國と云ふ神格國家の、實在的生命の中に一切の宗教と一切の萬教が歸一する道があつたのである。
 ああ奇しきかな、奇しきかな、嗚呼、皇國の國體！

佐藤定吉著	
日本精神と宗教	〇・一五送(三)
苦難より神の光へ	〇・一五(三)
人は何のため生れたか	〇・二〇(三)
國體と宗教	〇・四〇(三)
榮光の日本	〇・五〇(四)
皇國日本の信仰	〇・八〇(六)
皇民信仰讀本	一・五〇(一二)
全地の囁き	一・〇〇(一二)
科學より宗教への思索	二・三〇(共)

佐藤定吉主筆
 月刊雜誌
 「東方の光」
 一ヶ月前金 一圓二十錢
 半年分前金 一圓二十錢
 一ヶ月前金 二圓三十錢
 米國一ヶ月前金 一弗

通信「靈響」
 一ヶ年分 一圓六十錢
 外ヶ年分 一圓六十錢

<p>昭和十五年一月廿五日印刷 昭和十五年二月五日發行 昭和十七年五月一日増訂改版</p>	<p>Made in Hippon</p>	<p>定價 金六十錢 送料 四錢</p>
<p>長野縣北佐久郡西長倉村大字長倉四六九四 長野縣北佐久郡岩村田町一七二番地</p>	<p>著者 佐藤定吉 發行者 岩村田活版所</p>	<p>發行所 長野縣北佐久郡西長倉村 大字長倉四六九四 皇國基督會 振替東京七七五一 電話 追分 四</p>

424
156

終

